Movic Game Collection 17

Novel 館山 緑

ONE
～輝く季節へ～



“There is such a thing as forever. . . ”
Those words, I wondered who said them.
The words I happened to remember as I looked up at the sky.
They seemed to be the start of something.
Yeah,they were definitely the beginning. The beginning of the end.
There's voices calling me from opposite directions.

Movic Game Collection 17

Novel 館山 緑



ONE
～輝く季節へ～

" There is such a thing as forever. . . "
Those words, I wondered who said them.
The words I happened to remember as I looked up at the sky.
They seemed to be the start of something.
Yeah,they were definitely the beginning. The beginning of the end.
There's voices calling me from opposite directions.

ONE ～輝く季節へ～
Episode.IV

原作◆タクティクス
文　◆館山　緑



MGC

表紙イラスト：タクティクス

プロローグ

あいつはどう考えても、王子様っていう柄じゃなかった。
言動は変だし、真顔で冗談言って、馬鹿みたいなことばっかりやってた。
あたしの方も、可愛い乙女とは程遠い声で怒鳴り散らしてた。
あいつとの出逢いは最悪だったと思う。

「無理してるだけにしか見えないけどな」
そう指摘された時には、ただ、腹立たしかっただけだ。
だからあいつの側であたしが、こんな風に変わってゆけるなんて考えてもみなかった。
だけど、あの時あいつは王子様になった。
先輩が変えてくれたあたしよりも、あいつが変えてくれたあたしの方がずっと好きになれた。

なのに。

そんなこと、童話でしか有り得ないはずなのに、あいつは……どこからもいなくなってしまった。誰もあいつを憶えていない。

まるで悪い魔女の呪いをかけられたみたいに、きれいさっぱり消えてしまった。
あいつの魔法で乙女にしてもらったあたしだけが、この世界に取り残されている。
約束のこの場所で、あたしはただ待っている。
あいつの隣にいたままのあたしが、ここで凍り付いている。
もうすぐ、春が来るのに。

第1章　リボンをかけて走り出そう

（こんな最低の転校初日って、本当にありなのっ!?）

七瀬留美は怒りのあまりに、転んだ足の痛みも忘れて走っていた。

お気に入りのリボンがほどけていないのを確認しながら、それでも走るスピードは決してゆるめない。

始業までに間に合わないと、担任の先生が新たなクラスメートに紹介してくれる時に、大恥をかいてしまうのだ。それだけはどうしてもできなかった。

昨日確認したのと同じ道を全力疾走する。

留美は何とかチャイムが鳴っているうちに、学校の受付まで来ることができたのだった。

「おっ、初日からギリギリか？」

担任である渡辺先生がのんびりとした表情で、職員室に走り込んできた留美の方を見る。

「いえ……ちょっと迷ってしまって」

留美は膝の痛みも堪えて、にっこりと笑ってみせた。

実際にはどう考えても迷うようなルートではないのだが、実際のところを説明すると話がややこしくなってしまうし、何より腹立たしかった。

（それにしてもあいつ……！）

留美が遅刻寸前になった原因を作った少年の姿を思い浮かべる。
走ってきた留美も悪いと言えなくないのだが、それ以上に向こうの方もまたとんでもないスピードで駆けてきていた。
遠慮会釈のないスピードで、男と女が激突するとどうなるか。
よほどの例外でもない限り、大抵は女の子の方が吹っ飛ばされることになるのである。
クリーニングしたばかりの制服も、買って間もないリボンも、アスファルトとお友達だ。
もちろん留美の体は、まだ全身が痛くてたまらない。
ぶつかった時、その少年はまともに謝ろうとしないばかりでなく、連れの少女に後を頼むと言い置いて、そのまま駆けていってしまったのだ。
「ねえっ、何なのあいつはっ！」
「ええと、ごめんねえ。浩平、こういう時は自分勝手だから……」
人の好さそうな少女は、留美のスカートを払って、手早くリボンを直すと、ぺこっと頭を下げた。
「わたしもそろそろ行かないと学校、遅れちゃうから。ごめんね」
そう言ってその少女もぱたぱたと走っていったのだ。
あの少女が親切だったせいで、余計に『浩平』という少年への怒りが倍増する。

「ん、どうした七瀬。具合でも悪いのか？」
いつの間にか顔が強張っていたらしい。留美は慌てて首を振った。
「何でもないです。ちょっと考え事してて」
「じゃあ、そろそろ行こうか」
担任はそう言うと、あくびをしながら歩き出した。

教材を運んでいる生徒が、見憶えのある制服を着ているのに気が付いた。
（さっきの子達、ここの学校の生徒だったんだ……）
あの少年に逢ったら、怒りのあまり怒鳴りつけてしまいそうだが、広い学校の中だ。遭遇する頃には怒りも収まっているだろう。
「ここだ」
そう言われるまでもなく、廊下の脇に机と椅子が置いてあったので、そこが目的の場所だとすぐに解った。
中からはざわざわと生徒達の声がする。
担任が来る前に、一時のお喋りを楽しんでいるのだろう。
（今度こそ、失敗する訳にはいかない）

留美は決意に満ちた表情を扉に向ける。
前にいる担任は当然、その決意に全く気付くことなく扉を開けた。
その瞬間。
教室内がざわめいた。
留美は一瞬、びくっ、と震えたが、自分に寄せられている男子生徒からの視線が、今までお馴染みだった『がさつな女子を見る視線』ではなく、今までは他の可愛らしい女子生徒が受けていた賞賛の視線であることに気が付いた。
（大丈夫……そう、大丈夫。あたしは、絶対やれる）
留美は緊張してかすかに震える拳を、他人に解らないように握り締めた。
「んあー、先週の終わりに話した通り、転校生くんだ。じゃ、自己紹介どうぞ」
担任の視線が留美を促すと、生徒達の喧騒がいきなり止む。
留美は鏡の前で必死で特訓した笑顔を浮かべ、口を開いたのだった。
「七瀬留美です」
何度も繰り返して、すっかり暗記してしまった自己紹介。
前のクラスにいた、可愛いタイプの女の子を思い浮かべながら、にこやかに告げる。
思った以上の効果だった。

自分の自己紹介が聴き取れないほどの歓声があがり、思わずよろけそうになってしまう。
（こ、こういうものなの……!?）
今までとのあまりの差に、留美は思わずショックだった。
『……違う幸せがおまえを待ってるよ』
過去との決別をさせてくれた先輩の言葉が、ふと留美の頭をよぎる。
今までとは違う、女の子としての幸せを、頑張って手に入れる為に心機一転を誓ったのだから、絶対に失敗する訳にはいかないのだ。
男子生徒の歓呼に包まれながら、留美は窓際に用意された自分の席の方に向かった。
一番後ろにいる、担任に折原と呼ばれた少年が、廊下に出してあった机を設置してくれているのが、男子生徒に囲まれた留美にも見えた。
チャイムが鳴って男子の渦が納まると、留美は自分に用意された一番後ろの席に向かって歩き出した。
「あの……ありがとう。机、持ってきてもらって」
しかし、その少年はとんでもないことを言い出した。
「足はもう大丈夫なのか？」
「え？」

どうして逢ったこともない少年が、朝にあったことを知っているのだろう。
留美は軽く眉をひそめて少年の顔を見上げた。
「……ぐあっ」
朝に激突した、世にも無礼なあの少年ではないか。
よりにもよって同じクラスで、しかもすぐ前の席とはあんまりだ。しょっぱなから不運もいいところだ。
しかし、こんなところで乙女の道を断念する訳にはいかない。
「いやあ、今日は凄い剣幕だったな」
取るべき道は当然、黙殺だ。
留美は根性で笑みを復活させた。確かこの少年のことを、連れの少女は『浩平』と呼んでいた。諸悪の根源、折原浩平（おりはらこうへい）は面白そうにこちらを見ている。
「えっと、折原君って言ったっけ？　よろしくね」
そう挨拶して、一番後ろの席につこうとすると、浩平は制止した。
「そっちは俺の席。おまえのは、その前」
「あ、前後入れ替えたんだ」
留美が鞄を机に置くと、浩平は駄目押しに繰り返してきた。

「ところで今日は凄い剣幕だったな」
「……っ！」
叫び出しそうなのを堪え、留美は早々に席についた。
（ああもうっ、何でこんな男が乙女の道を邪魔してくるのよっ）
順調だと思っていた乙女への道に思いもかけない邪魔が入ったが、浩平もそのうち諦めるだろう。
しかし、留美の予想は大きく間違っていた。
折原浩平は、そんなまともに予想が立てられる相手ではなかったのである。

「今日はここまで」
最初の授業が終わるチャイムが響くと、教科担当の教師がぽん、と教卓を叩いた。
号令がかかり、留美も立ち上がる。
「ぐ……あ……」
留美は中途半端な位置で固定されていた。
頭に走る激痛から察すると、どうやら髪の毛がどこかに引っかかっているらしい。結局留美は教師が出ていってから、慌てて椅子の方に向き直った。

髪が、どう考えても誰かの手でくくり付けられたとしか思えない位置に、しっかりとめられている。留美は必死で髪をほどいた。
もちろんこんなことを授業中にできた人間は、後ろに座っている浩平以外に有り得ない。
「殺す気かあっ！　このアホッ」
「やっぱり今朝の子と同一人物だったか」
留美は自分の反応が致命的だったことに気が付いた。
慌てて咳払いしてごまかしてみる。
しかし、浩平は次にはどんな反応をするのか、と言わんばかりに好奇心に満ちた表情でこちらを見ている。
（こ、これは……ごまかしようがないわ）
今朝浩平と一緒にいた少女もやって来る。どうやら彼女も同じクラスだったらしい。
女の子らしくてやさしい雰囲気の彼女に、浩平は何と説明するだろう。このままではまた今までと同じ道だ。
気が付くと留美は、教室から駆け出していた。
廊下をしばらく走っているうちに、留美は情けなくなってきて足を緩めた。
（あたし、何してるんだろ）

こんな時に『乙女』ならどうするのだろう。
傷心の思いを抱いて、屋上にでも行くのだろうか。
親しい女友達にでも、辛い気持ちを訴えているのだろうか。
どう考えても、今までの留美のように相手を怒鳴りつけるはずはない。
留美は溜息をついた。
とりあえず留美は屋上に向かってみたが、結局次の授業の時間が近付いてくるのに気が付いて、そのまま引き返してしまう。
(あいつと逢うの、やだな)
留美はチャイムが鳴っているうちに、自分の席についた。
「なあ、七瀬」
それを待っていたかのように、浩平が背中をつつく。
「何よ」
留美は仏頂面で振り返った。
「悪かったよ。仲良くやっていこうぜ」
「よく言えるわね、んなことがっ。あんなことしといて……」
今度は声を殺して浩平を睨み付ける。

しかし浩平は実に悪気のなさそうな顔をしてこう続けたのだ。
「いや、あれは朝ぶつかった子と同一人物かな、と思って」
「そんな、当たり前……あ」
もちろん浩平は、留美があの粗忽な言動の女なのかと訊いているのだ。それに答えてしまうのは『がさつな女です』と公言しているようなものだった。
教壇に先生が立った気配がする。
これ以上話しているとぼろが出るばかりだ。
「もう話しかけないでっ」
留美はぷいっと前を向いた。

次の休み時間になってすぐ、留美の周りに男子生徒の人だかりができた。
「七瀬さんっ、うちの学校の感想はどうっ？」
「昼休みにでも学校を案内してあげようか！」
「こらっ、押すなっ。俺が先だっ」
いきなり押しかけてきた男子連中に戸惑っていると、彼らの後ろから女の子の声で、ちょっとごめんね、と話しかけられる。朝に浩平と一緒にいた少女だった。

「七瀬さん、ちょっといいかな」
「あ、うん」
さすがに耳鳴りがしそうになっていたので、ここから抜け出せることはありがたかった。
「じゃあ、廊下でも行く？」
浩平は他の男子生徒の席でしゃべっている。そもそも男子の生垣から女の子が二人出てきたことにも気付いていないようだ。
後ろから何人かが声をかけてきたが、さすがについて来る者はいないようだ。
その、やわらかそうな茶色の髪と、屈託のない笑みが印象的な少女は、静かになった廊下でいきなり申し訳なさそうに謝った。
「七瀬さん、浩平がとんでもないことばっかりしてるみたいで、本当にごめんねえ。悪気はないんだけど、ああいう性格だから……」
他の人にも迷惑をかけているのがすぐに想像できる態度だった。
留美は肩身の狭そうな彼女に、思わず同情してしまったほどだ。
「うーん、ああいうのはちゃんと繋いでおいてほしいわよ。いつもあんな感じなの？」
「うん」
「それで、いつもあなたが後始末して回ってる訳？　ええと、名前何て言ったっけ」

「瑞佳だよ。長森瑞佳。よろしくね」
その少女、瑞佳はにっこりと微笑んだ。
「もしかして、あいつとはつきあってんの？　わざわざ謝りにくるところを見ると」
だとすると彼女の男性に関する趣味は、いかにも乙女というイメージにそぐわず、かなり風変わりと言うべきかもしれない。
しかし瑞佳は首を振った。
「ううん、幼馴染みなだけだよ。小学校の頃からずっといるから、どうしてもわたしが浩平の面倒を見ちゃうような感じになって。浩平ってああだから、誰か面倒を見てくれないと困っちゃうしね」
困っちゃうどころじゃないでしょ、と突っ込みを入れようとしたが、さすがに人の好さそうな瑞佳へ浩平に対しての文句を言うのは筋違いだ。
「凄く大変なんじゃない？」
「ちょっとだけだよ。朝全然起きないから起こすのが大変だけど」
「そ、そんなことまでやってんの⁉」
「だって起きないんだもん」
「あの……そう言う問題じゃなくて」

それではほとんど浩平に付きっきりではないか。
瑞佳はクラスでも1、2を誇る可愛い女の子だし、彼女を好ましいと思っている男子生徒もたくさんいるだろう。
そのうちの何割かは、絶対に瑞佳が浩平とつきあっていると思っているに違いない。
「それって……絶対素敵な出逢いを思いっきり逃してると思う」
「でも、とりあえず浩平にしっかりした彼女ができないと、わたし、安心できないもん」
瑞佳は溜息をついた。
普段からよほど浩平に苦労をかけられているのだろう。浩平にそんな物好きな彼女ができるかどうかはともかく、瑞佳の言うことはもっともだ。
「七瀬さんもあんまり浩平のやることを気にしないで、仲良くしてくれると嬉しいんだけど。悪気があってやってる訳じゃないから」
「それは、折原次第だと思うわよ……」
悪気なしであれだけ大騒ぎを繰り出すパワーは、そうそう対抗できるものではない。
チャイムが鳴り、瑞佳は席に戻った。
それと入れ替わりに浩平が戻ってくる。
「お、どうした七瀬。腹でも減ったか」

「……もういい」
乙女を迎えに来る王子様とは較べ物にならないのは当然として、もう少しまともな応対をしてもらわないと、クラスメートとしてもつきあえるか怪しいものだった。

休み時間が来るたびに男子生徒の山が押しかけていたが、昼休みになると、その規模はいきなり大きくなった。
「七瀬さんっ、昼一緒に食べようぜ。弁当？　それとも購買に行く？」
「お弁当だけど……」
「そっかあ。俺もなんだ。一緒に食べようぜ」
「あっ、俺もパンだから一緒していいかな」
「こらっ、抜け駆けするなっ。俺も入れろっ」
たちまちのうちに男子生徒が留美を囲んで席を確保し始めた。
視界の隅に、机を取られて逃げ出した浩平の姿がよぎる。少し気の毒には思ったが、いろいろ話しかけてくる男子達に返事をしている間に視界から消えていた。
「七瀬さんってさ、見た目おとなしい系かなって思ったんだけど、結構喋ってくれるよね。いいよな、そういうの」

「そうかな。ありがとう」
「その制服、可愛いな。このへんだとあんまり見ないデザインだけど、前に住んでたところだと、そういうデザインのって多いんだ？」
「ううん、そうでもないけど」
「七瀬さんに似合ってるよ」
「ありがと。この制服、気に入ってるんだ」
微笑みを保ちつつ応対しているうちに、留美は一緒に食べているグループに女子生徒が一人もいないことに気が付いた。
（こんな風に男の子が珍しがって寄ってくるから、喋ってくれないのかな）
今日は瑞佳以外に喋った女子がいなかった。
「七瀬さん？」
「あ、ごめんね。ちょっと考え事してて」
留美はもう一度笑みを作った。
昼休みは男子生徒と歓談しながら終わってしまった。ランチボックスを片付けている間に、チャイムが鳴ってしまう。
「こらこら、そこ。机を片付ける！」

教室に入って来た先生に注意され、男子達は慌てて机を元通りに戻して自分の席についたのだった。

放課後。緊張しながらの初日は、何とか終わった。
「おい七瀬。6時間目が終わったぞ。これを放課後と呼ぶんだぞ」
授業が終わって開放的な気分になったのか、浩平が明るい口調で語りかけてくる。
しかし、話題が間抜けだった。
「そんなこと知ってるわよ。異次元から転校して来たんじゃあるまいし」
「何だよ。親切に教えてやってるのに」
留美は頭痛がしてしばらく黙っていた。
何と返事をしようか迷っている間に、またまた男子生徒の津波が押し寄せてくる。
「七瀬さんっ、これから帰り？」
「校内を案内してあげようか」
「よかったらさ、商店街とかいっしょに行かない？　何かおごるし」
「お前なあっ、いきなりそれかっ。だったら俺達全員におごっとけっ」
留美はにっこり笑った。

「どうしよっかなあ」
そう言った時、部活を見て回りたいと思っていたのを思い出した。
「あ、ごめんね。部活を決めようと思ってたんだ。また今度ね」
「そっか。しょうがないよな」
「ばいばい、七瀬さん」
残念そうな男子達は、それでも文句を言うことなく帰ってゆく。留美は鞄を持って教室を出ると、ふらふらと校内を見物することにした。
しばらくでたらめに校舎の中を散策する。
一年生や三年生の教室にさしかかると、やはり好奇の眼で見られる。しかし、その視線でさえもかつて留美が受けたものとは全く違っていた。
(みんなの眼に、ちゃんと乙女として映ってるのかな……)
男子生徒が留美を見ている表情は、クラスメートと同様、可愛くて綺麗なものを見るものだった。それがくすぐったいような、嬉しいような気持ちだった。
留美は何となく、髪のリボンに触れる。
真新しいリボンの触感が気持ちよかった。
いつの間にか、留美は周囲が寒くなっているのに気が付いた。一階の渡り廊下から体育

館の方に出たらしい。
運動部の生徒は、今頃部活にいそしんでいるのだろう。
ジャージ姿の生徒達が、留美の側を通り過ぎてゆく。
パシーン、と聴き憶えのある音が留美の耳に飛び込んだ。
竹刀を打つ音だ。
「あ……っ」
留美は思わずぎゅっと瞼を閉じた。

●●●

あんな言葉、聞くつもりじゃなかった。

「七瀬部長ってさあ、あれ、何なの？　自分は竹刀を振りもしないくせに、あんなに偉そうにしちゃって。大体、何で試合に出られない女が部長やってんのよ。今までずっと男子が部長だったんでしょう!?　男子でいいじゃん」
「ああ、前の部長だった先輩がさ、七瀬部長を推したんだって。故障する前はすっごく強

かったんだけどね。あれ、あんた知らないか」
「知る訳ないじゃん。その先輩と七瀬部長、できてたんじゃないのぉ？」
「まあ、あるかもしれないよね。強かったって言ったって、所詮、過去の栄光な訳だし」

結局、立ち尽くしてるしかできなかった。

厳しくしてたから、嫌われてるんじゃないかとは思ってた。ただ、あたしが今まで頑張ってきたことを、少しは評価してくれるんじゃないかと思ってた。

でも、そういう訳じゃなかったんだ。

部は前より強くなった。

試合で勝ち抜いていけるようになってきた。

でも、現役じゃないあたしがどれだけ奮闘しても、嬉しくないひとだっているんだ。先輩とあたしの関係まで勝手な勘繰りするくらい、あたしのしてきたことは、彼女達にとって無意味だったんだ。

きっと、あの子達はあたしのことを鬼か何かだと思ってるのかも知れない。

歳なんかひとつしか違わないけど、解り合えることなんか有り得ない。
あたしがしてきたことって、本当に意味があるんだろうか。
必死で頑張る意味が。

●
●
●

留美は気が付くと、早足で廊下を歩いて下駄箱の方に向かっていた。
竹刀の音を聴くのが辛かった。
剣道だけでなく、激しいスポーツはほとんどが無理になってしまった体。走れるようになった後も、昔よりずっと体が重いままだ。
これから一生胴着を着て激しく動くことなど無理になってしまった後も、竹刀の音だけは最後の苦しみを思い起こさせる。
留美は下駄箱の前で、きつく拳を握り締めた。
「七瀬さん、何してるの」
側で知らない少女の声が響いた。

ショートボブの、気の強そうな女子生徒だった。彼女のことをクラスで見た憶えがあるのに気が付いた。
「同じクラスのひとだよね」
「そう、広瀬真希（ひろせまき）。憶えてないだろうけど。さっき、どうしたの？　何だかずいぶん怖い顔してたわね」
昔のことを思い出してしまっていたのを見られていたらしい。
留美は慌てて取り繕った笑顔を浮かべた。
「ううん、何でもないの。広瀬さんはどうしたの？」
「あたしは教科書を忘れただけだけど」
真希は少しむっとしたような顔になった。
しかし、留美はその表情を読み取ることができなかった。
「じゃ、またね」
そのまま真希は校舎の中に消えていった。
（乙女になるんだから……そんな怖い顔なんかできない）
留美は誰もいなくなった下駄箱で、もう一度笑顔を作った。
それは、ほんのわずかではあったけれど、空虚な作業だった。

その日、留美は眠る前にベッドの中で一日のこと思い起こした。
新しいクラス。変人の折原浩平。可愛くてやさしい長森瑞佳。賛美してくれる男子達。
真新しいリボン。
そして、竹刀の音。
（あ、部活、見てくるの忘れた）
明日こそはちゃんと部活を見てこよう。
そう思いながら留美は眠りについた。

第2章　真・乙女のミッション

一時間目の授業が始まっても、留美は鳩尾(みぞおち)に走る痛みを堪えていた。
（全く……あの馬鹿っ！）
初対面も充分最悪だと思っていたが、今日はもっとひどかった。
あの時はただぶつかっただけだが、浩平の学習機能が働いたのか、今朝はぶつかり方をバージョンアップしたらしい。
ぶつかった瞬間に、何と浩平は留美の鳩尾に一発入れていったのだ。もちろん、その後に素早く逃亡したのは言うまでもない。
小さくなってゆく浩平の後ろ姿を見ている留美に、瑞佳は平謝りした。
「ごめんね七瀬さんっ！　本当にごめんなさいっ」
「あなたが謝ることじゃな……いたっ」
浩平の一撃は、鳩尾にクリーンヒットしたらしい。大した力ではなかったのが、唯一の救いだ。
「無理しない方がいいよ。わたし、ついてるから」
しかし、こんな馬鹿馬鹿しい理由で瑞佳を遅刻させる訳にもいかない。
「走るわよっ」
「え、でも……」

「こんな馬鹿な理由で遅刻したら恥よ、恥！　ええっと、瑞佳。行こう」
痛みはひどいが、走れないほどのダメージはきていない。
留美は全力で走り出した。昔のようなスピードは出ないが、充分いけそうだった。瑞佳も後ろからついてくる。
このペースで走っていければ、ぎりぎり間に合うだろう。
（絶対蹴倒してやるっ！）
留美は心の中で物騒な誓いを立てながら、ただ、全力疾走したのだった。

（目標捕捉）
教室の扉に手をかけた、見憶えのある後ろ姿を確認する。同時に廊下にいる人間の視線が、留美に向いていないことも確認した。
今だ。
浩平が教室に滑り込む寸前、留美は効き足で踏み込むとジャンプした。
「どうやら間に合ったみ……」
浩平は言葉を全部言いきることができなかった。
死角から留美に蹴倒され、教室の床に突っ伏していたからだ。

「おっはよう、折原君。今日もいい天気ねっ」
「よくもぬけぬけと……」
恨みがましい眼で留美を睨みながらも起き上がってくる。やはり体は丈夫らしい。
隣にいる瑞佳は、ほとんど息も絶え絶えといった感じだった。
「もうっ、むちゃくちゃ走ってきたんだよ。疲れたあ。でも、七瀬さん。お腹を痛めてたのに、もの凄く速くてびっくりしたよ」
心底感心したように留美に笑いかけてくれる。
「ま、ちょっとだけ体力には自身あるかも」
ずっと剣道一直線に鍛錬してきた日々のおかげで、多少のブランクはあっても走るのには困らなかった。
浩平はぶつぶつと文句を言っていたが、先生が入ってくると自分の席についた。

そして、今日最大の驚きは、このぶつぶつ文句を言っている少年からもたらされた。

授業中、ぽんっと後ろから何かを手渡された。
『こんなものが回ってきたぞ』

朝のこともあって、どうしても表情をゆるめることはできなかった。強張った顔のまま、ノートをいい加減に破って作った手紙を受け取る。
(汚い字……どう見ても男子よね)
しかも、よく見ると留美の名前が書いてある訳でもない。
気になってしまい、その手紙をそっと開いた。
「やば……」
背後で浩平が軽く狼狽する気配がする。多分、宿題でも忘れたのだろう。
しかし、そうでないことはすぐに解った。

2年A組女子人気投票開催

留美の頭の中で、カキーン、と金属音がしたような気がした。
どうやら男子の間で回されているメッセージらしい。よく読むと女子には回さないようにと書いてあった。おおざっぱな浩平はあまり気にせず、そのまま留美へ回してしまったのだろう。回した直後に気付いたが後の祭、というところだろうか。
(女子の人気投票、ということは……)

一番可愛いと思う女の子を男子が投票するのだ。これでトップを取れば、乙女の証明と言っても過言ではない。
そう。
乙女を目指すなら絶対やるしかない。
留美は静かに手紙を畳み、そのまま授業に戻った。
その時ばかりは、心底授業が終わって欲しいと心から祈ったのだった。

休み時間になると留美はにっこり笑いながら、有無を言わさず浩平を廊下に引きずって行った。浩平も半ば予測していたのか、留美に捕まる前に逃げようとしたが、当然逃がすはずもない。
「折原。これ、ほんとに実施されるの？」
「される。昨日の住井の言動がおかしかったからな。こいつの準備をしてたんだろう。多分、おまえが転校してきたんで思いついたんだろうな」
留美は頭を抱えた。
「ああっ、こんなの知らなきゃよかった。絶対自然にしてられないわよ」
「自然にしてたら絶対落ちるだろ」

浩平の茶々にまともに応じる余裕もなかった。
「あのさっ、折原……現時点での順位とか、解るかな」
「始まったばかりだからな。まだ大して票も集まってないと思うぞ」
「それでもいいから、訊いてきてくれない……？」
断られるかもしれないと思ったが、案外浩平は気軽にうなずいてくれた。
「まあ、住井に訊くだけだしな。そこで待ってろよ」
浩平はもう一度教室に入ってゆく。
（あたしの名前、あるのかな……）
授業中に見回しただけでも、この二年Ａ組にはかなりレベルの高い女の子が数人いるようだった。廊下側にいる、ちょっと冷たい雰囲気の三つ編みの女の子も、人形めいた美貌で美しかったし、他にも可愛くてお洒落な女の子が何人かいた。
しかし、一番留美が気になっていたのは瑞佳だった。
顔も、あの一番綺麗な女の子と遜色ない程度に整っているし、何より、温かな雰囲気で誰にでもやさしく親切な性格は、男子でなくても可愛いと思うだろう。
（やっぱり、瑞佳なんだろうな）
留美が溜息をついている間に、浩平が扉から出てきた。

「七瀬。お前、トップ独走中だぞ」
「嘘っ、ほんとにっ⁉」
『瑞佳を抜いて？』と訊こうとしたが、やめてしまった。それはさすがに悲しすぎる。
「二票だけどな」
「どこが独走なのよっ、あほっ」
勢い込んでいた分、余計に脱力してしまう。
「まあ、普通にしてたら七瀬だったら大丈夫だよ。クラスの野郎どもはお前に群がってる状態だしな」
「そ、そうかな」
「ただし、普通にしていれば、な。間違っても屁なんかこくなよ」
「こくかっ」
「ま、頑張れ」
浩平はにっと笑った。
その笑みは思ったより感じがよかった気がした。
留美は浩平がいなくなってからも、窓から外を見ながら人気投票のことを考えていた。
しかし、今まで乙女とは無縁で生きてきた留美が、愛らしい乙女の座を獲得するには、

まだまだ多くの試練があったのだ。

次の時間は英語の授業だった。

「では、今日はそこの席だな」

教科担当の先生が指差したのは、窓際の列だった。つまり、留美達の列だ。

『うわっ、当たる！』

留美はいきなりやってきた障害に、思わず瞼を閉じた。

しかも、留美が当たる予定の和訳問題は、まだちゃんと呑み込めていないところだった。

後ろから肩をとんとつつかれた。

『何を焦ってるんだよ。問題、解らないのか？』

『だって、英語苦手なんだもんっ』

そんなことを言っている間に、一番前の生徒が名前を呼ばれた。

『だったら、解りませーん、でへへへへーって言っておけばいいだろ？』

『そんな格好悪いことできないわよっ』

ただでさえ文系科目は、女の子の得意分野だというイメージがあるのだ。ここで問題に答えられないと、人気投票に大きく差し支えてきてしまう。

留美はさあっ、と蒼白になった。
『ねえ折原っ、お願い。ここ教えてくれないっ？』
もう二番目の生徒が答えを読み上げ始めている。音読が得意ではないのか、何度かつっかえている。それで無駄に時間が過ぎて行くのが唯一の救いだった。
留美は教科書の問題の部分を指差した。
『ま、いいか。うーん、ちょっと待ってろ』
浩平はしばらく問題を睨んでいたが、素早く教科書にさらさら書きつけてゆく。
『お待たせ』
そう言って浩平が教科書を返してきたのと、先生が七瀬、と呼んだのが同時だった。
「はいっ」
留美は慌てて立ち上がって、その部分の英文をまず音読した。
その後で、おそるおそる浩平の書いてくれた答えを読む。字がへたくそで、解読するのが難しかったが、この際贅沢は言っていられない。
(間違っていませんように……折原、合ってて！)
先生は留美が言った和訳をふんふん、と検証している。その時間がひどく長く思えた。
「よし、大体合ってるな。後はここの訳としては……」

先生が説明している文句の後半は、留美の耳には全く届いていなかった。
次は浩平が当てられる番だった。まともに宿題をやっている訳ではなさそうだったのに、何とか答えてゆく。
どうやら留美が当てられている間に自分の問題を訳したらしい。英語は得意なのだろう。
留美はぼうっとしたまま、乙女への道に横たわる最初のハードルを越えられたことを感謝したのだった。

チャイムが鳴ってから、留美はすぐに後ろの席の方へ顔を向けた。
「助かった、折原」
浩平はさもあらんといった表情でうんうんとうなずいた。
「これからは俺のことを『ナンデモ折原くん』と呼ぶんだな」
あまりのネーミングセンスに留美は頭を抱えた。
「呼んであげてもいいけど、相当に格好悪いわよ。あんまり格好悪すぎて、感謝してるというよりは、おちょくってるみたいじゃない」
「じゃあ、キラー折原と呼べ」
ますます地を這うような悪趣味はエスカレートしている。留美はこれ以上情けないネー

ミングについての話を聞いているのもわびしいので、別な話を切り出してみた。
「このクラスじゃ、どの子が人気あるんだろう」
「さすが七瀬だな。闇討ちか？　だけど、うちのクラスは小粒ぞろいだからな、誰を追い落としてもあんまり差はないんじゃないか？」
「誰が闇討ちなんかするのよ。違うわよっ。単に興味があっただけ」
現実には浩平が言うほど『小粒揃い』でもないだろう、と思うが、浩平のことだ。女の子の可愛らしさについて、普通の感覚はないのかもしれない。
それでなくてもすぐ側に瑞佳がいるのだから、女性に関する理想も高くなるだろう。
「じゃあ……瑞佳とかは？」
「瑞佳って誰だ？」
一瞬硬直した浩平は、おそるおそる訊いてくる。本当に解らなかったらしい。
「あんたは……幼馴染みの名前も憶えてないの!?　長森さんよ、長森さん」
「で、長森が何だっけ？　近寄ると牛乳臭いのはいつものことだぞ」
「んなこと言ってないわよ。瑞佳はA組じゃ人気ありそうだから、票が集まりそうだって言ったの」
「あいつなんかに入れる奴、俺くらいだぞ。一人くらい同情票を入れてやらないと気の毒

だからな。お前、買いかぶりすぎじゃないのか？」
　どうやら本気でそう思っているようだ。
　留美は浩平の女性観が想像できなかったが、それでも言葉を続けた。
「そんなことないと思うけど。あんた、見馴れ過ぎてるんじゃないの？」
「そうか？」
　浩平が他の女の子と喋っている瑞佳の方をしばらくじっと見た。
　首を捻りながらしばらく見ていたが、やがて留美の方に向き直る。
「あいつの成績と同じだな」
「えっ？　何それ」
「全科目平均点以上は取るが、満点はない」
　世の中の女性が聞いたら怒り出しそうな感想を述べる。
　もちろん、留美もそのうちの一人だったのは言うまでもない。
「するとあんたは、赤点だらけでも満点がひとつあればいいのね？　毛深くて腰回りが胸より太くてО脚でも、指さえ手タレのように美しければ、瑞佳よりもいいのね？」
「極論だろ、それは」
　浩平はそう言うものの、留美にはどうにも信じられなかった。

もちろん浩平の眼にも瑞佳は可愛らしく映っているのだ。だが、それを何となく認めたくないのだろう。照れくさいのかもしれない。
(こんなこと言ってたって、投票では瑞佳に入れるのよね)
そう思うと、何故か留美は寂しいような気がした。
票が増えてほしいのは事実だが、こうしてまがりなりにも協力してくれる浩平が、自分よりもずっと乙女らしい女の子に投票する、というのが少しだけせつなかった。
(折原が誰に入れたって、別にいいじゃない)
留美は浩平に気付かれないように溜息をついた。

しかし、次の休み時間になると、浩平は憤然としながらこう言ってきた。
「七瀬、協力するぞ!」
「な、何よいきなり……」
その勢いに圧されて、留美は首をそらした。そのままだと頭をぶつけそうだ。
「住井が長森ファンクラブ代表として、長森に賭けたからな。俺は成り行き上、お前を応援することになった」
「……そんなことだと思ったわよ」

留美は大きく溜息をついた。
浩平が意見を翻す理由などせいぜいこの程度だ。
理由があまりにも情けないが、浩平は本気で燃えているらしい。ぎゅっ、と拳を握って訴えた。
「これから俺が全力でフォローしてやるから、大船に乗ったつもりでいろ」
「で、何を賭けたの？」
「食堂のB定食」
「何だかずいぶん安上がりな熱意ね」
学校を見学した時に一度メニューを見たが、そんなに高いものはなかったはずだ。ここまで熱意を燃やして戦うほどのものでもないはずだが、多分、浩平の性格からいくと、どんな小さなことでも本気で遊んでしまうのだろう。
子供みたいなものだ。
それでも、やはり自分を応援してくれるというのは嬉しかった。
「で、賭けが成立したってことは、あたしと瑞佳との間に、そんなに点差はないのよね」
「ああ、現状だと6対5でお前がリードしてる。だが、この後で住井がテコ入れしてくるからな。油断はできないぞ」

動機があまりに低レベルとは言え、浩平は真剣に案じてくれているようだ。
留美は嬉しくなって、思わず微笑んでいた。
「ありがとう。折原、頑張るね」
「そうしてくれ。俺の昼飯の為にも」
浩平はがしっ、と掌を握ると、ぶんぶんと振ってみせた。
(う、うーん、本当に当てにしてもいいのかしら)
妙に不安になるが、せっかくの協力者を断わる必要などない。乙女の道は険しいのだ。
発表は明後日の午前中だった。
あと一日と半分を、乙女として堪え抜かねばならない。
(絶対、やるわ)
留美は決心を固めていた。

現代国語の時間、留美は先生に言われた期末テストの範囲をチェックする。
(やっぱり、教科書が変わったのが一番のネックよね)
この調子だと、新たに憶えなければならないところも結構ありそうだ。理数系の進行は前の学校の方が早かったが、文系科目はかなりきついようだった。

(これは、本腰入れて勉強しないとね)
留美が頭の中で、テスト勉強のスケジュールを立て始めると、先生は突然言い出した。
「じゃあ、これからミニテストを行う」
男子生徒を中心に、大きくブーイングが上がったが、期末テストの範囲が早く終わったことで機嫌がいい先生は、笑いながら続けた。
「ミニテストだからって手を抜くなよ。答え合わせの後で、高得点者と低得点者の発表をするからな」
留美はびくっ、と震えた。
(ここが正念場じゃないの)
そう思って緊張している留美に、浩平はのんきに語りかけた。
『ほんと、煽るのがうまいよな。あれじゃあ、真面目にやらざるを得ないもんな』
『願わずとも、戦いの場は用意されたという訳ね……』
呟きをもらす留美に、浩平はうなずくと重々しい口調で言った。
『そういうことになるな。だが、長森は現国だと手強いぞ。科目別でトップを取ったこともあるからな。あいつに勝つなら、満点を狙うしかない。七瀬は現国は得意か？』
『さすがに、そこまでの自信はないわ』

国語は苦手ではないが、トップを狙えと言われるとやはり躊躇（ちゅうちょ）する。何となく、胃のあたりがきりきりと痛んできた。

ここで瑞佳に負けたら、多分、これ以降の巻き返しはほぼ、不可能だ。

瑞佳は外見も可愛いし、性格もいい。元々から好かれる女の子で、誰が見ても可愛らしいと思うタイプだ。しかも、留美のように必死の努力で成立している乙女ではない。言わば、天性の乙女なのだ。

どう考えても、瑞佳が自滅して脱落などというのは有り得ないのだ。

一方、留美の方には転がり落ちそうな要素は山ほどある。

本来の言動がぽろりと出ただけで、男子生徒の熱はたちどころに冷めるだろう。

眼の前が暗くなったような思いの留美に、浩平は宣言した。

『共同戦線だ』

『えっ……？』

浩平の声に全く不安はなかった。

『俺も手伝うし、住井にも訳（わけ）を話さず手伝わせてやる。お前の隣の席も俺が覗いてやる。四対一だ。決して分は悪くないはず。お前はただ、答案を全部埋めればいいんだ』

『四人がかり、と言う訳ね……でも、そんなことして本当に平気なの？』

『どのみち、覗いてるのは俺だ。ばれても七瀬がやばいことはない』
　ここまで浩平が罪をかぶって、留美を勝たせてくれようとしているのに、今更やりませんとは言えない。
　茨(いばら)の道でも、行くしかないのだ。
『解った。お願い』
　留美は真剣な眼で浩平を見据えた。
　浩平はぐっ、と親指を立ててみせる。
「始めるぞ」
　先生の言葉で、戦いは始まったのだ。

　留美は最初にテスト用紙を全部チェックした。
（これ……時々凄く難しい問題が混ざってる）
　大部分の問題は自力で解けるものの、いくつか解らないものがあるようだった。
　小声で浩平が伝えてくる。
『解けてるかどうか合図しろ。解けてるならうなずけ。解けてないなら首を横に振ってくれ。今こっちで解けてないのは、３番と……』

これは留美も解けそうだった。こくりとうなずく。
『12番……』
この問題は自信がない。首をかすかに振った。
『ラスト。14番だ』
浩平が言ったのは、留美が一度も見たこともないような問題だった。やはり浩平も解けないのだろう。
首を横に振ってみせる。
『他のが全部解けるならうなずく。駄目なら首を振る』
他の問題は充分解けそうだった。しっかりとうなずいた。
『周りを見てやる間に、他の問題を解いてろ』
留美は決して長くはないテスト時間の間に答案を埋める為に、必死でシャーペンを動かし始めた。
順番に上から答えを書いてゆく。
思った通り、気持ちよく文字で埋められていった。普通なら充分調子よく解けている状態だった。
しかし、今日はそれではいけない。何一つミスはできないのだ。

『12番の答え、言うぞ』
書いている途中で、浩平が小声で答えを読み上げる。それを全部書き写すと、留美はうなずいた。
その後、間もなく答案はたったひとつの答えを覗いて埋められた。
しかし、残りの答えを浩平が言ってくる様子はない。
（もしかしたら、周りの子達も誰も解いてないのかもしれない）
留美は自分でも必死で考えてみたが、どうしても解答が浮かばなかった。考えてみても、妙に難しすぎるような感じがした。
浩平が答えを告げて来ることはないまま、残り時間はあと二分を切った。
（瑞佳は、この問題できたのかな）
ひどく不安になってきた。その間も時間は刻々と過ぎてゆく。
（もう……駄目なの？　あたし、乙女にはなれない……？）
背筋にきりっ、きりっ、と痛みが走る。
留美が溜息をついてシャーペンを置こうとした瞬間。
『14番。行くぞ』
浩平が答えを言い始めた。

留美は慌ててその言葉を写し始め、書き終わるか終わらないうちに先生の制止がかかったのだった。

まだ名前を知らない隣の女子生徒と、答案を交換する。
(ごめんね。カンニングなんかして……)
心の中で罪悪感を抱きながら、先生の言う通り正解に丸を付けてゆく。全部付け終わると、答案用紙は後ろから前へ送られていった。
全部を集め終わると、先生は教壇でテストのチェックを始めた。
留美は先生から視線を離さず、順位が宣告されるのを待った。
「今回は難問を揃えてみたんだが、満点がひとりいる」
ナガモリミズカ。
思わず心の中で敗北の可能性をなぞってしまう。
「七瀬留美。転校早々頑張ったな。他の生徒も見習えよ。次点が長森、幸島、石原……」
順番に高得点者の名前を羅列してゆく。
しかし、留美にはその続きは全く聴こえていなかった。
(トップ……あたしが、トップなんだ)

感慨で胸がいっぱいの留美が我に返ったのは、先生がこう言った時だった。
「で、零点がひとり。折原浩平。昼寝でもしてたのか？」
「けげっ」
後ろから浩平の狼狽する声が聴こえた。
どうやら留美に答えを教えるので精一杯で、自分の答案を書くのを忘れていたらしい。
（折原……）
留美は申し訳なさと嬉しさがないまぜになったような、奇妙な感情を持て余しながら、チャイムが鳴るのを聴いていた。

「そう言えばさ、折原。あの14番の問題って自分で解いたの？」
先生が出ていってから、留美は後ろの席に体を向けて疑問を投げかけた。あれがなかったら、絶対瑞佳に勝つことなど不可能だったのだ。
浩平は声をひそめた。
「実はな……住井だ」
「嘘！　住井って、そんなに国語の成績がよかったの？」
読み上げられた上位の生徒達の中には、住井護（すみいまもる）の名前はなかった。

浩平は笑いながら首を振ると、ほぼ中央の列、後ろから二番目の席に座っている真面目そうな少女を指差してみせる。

「住井の斜め前に、眼鏡の女がいるだろ。あいつは幸島って言って、大抵国語でトップを取る奴だ。どう考えてもあいつの答案が出典だ」

「て、ことは」

浩平はうなずいた。

「住井は、俺なんかよりずっとカンニングの腕は上だぞ。埋められなかった奴を、幸島の答案を見て埋めたんだろうな。まあ、自分がカンニングしてるんだから、絶対文句は言えないはずだ」

「あ、あんたらは……」

感謝するんじゃなかった、と留美は思いきり後悔した。

「何にしろ、これでお前は長森より絶対優位に立ったはずだ。ここから先の負けは許されないぞ。気を抜くなよ」

「解ってるって」

留美は最大の山場を通り抜けた安堵感で、くつろいだ表情になっていた。

授業が終わってから、留美はまだそんなに馴れていない商店街に寄って帰ることにした。前に住んでいた街よりも小さな商店街だが、思ったより店は充実しているようだ。
そろそろクリスマスの飾り付けがちらほらと顔を覗かせている。大きなツリーはまだ立てられていないが、店のウィンドウには愛らしいオーナメントがいくつもぶら下がったミニツリーがいくつか見えた。
（あのオーナメント、可愛いな）
やはり乙女の真髄と言えば、素敵な恋人とふたりっきりで迎えるクリスマスイブだろう。
留美は夢見る表情で空想した。
いつもは着ることのないドレスを身にまとって待ち合わせ場所に向かうと、やさしい恋人が笑って手を振る。
完璧なエスコートで、ちょっと背伸びして予約した洒落た店に向かって、窓際の一番いい席でテーブルを二人で囲む。
気取った盛り付けのご馳走。
『メリー・クリスマス』
そう言いながら差し出される花束やプレゼント。
それをはにかんだ笑顔で受け取る留美。

照れながらダンスフロアに二人で出て、踊り始める。囁くような声で会話を交わし、長い間踊り続ける。
そして夜も更けて、自宅まで送られる。
そして、別れる寸前にそっと、キスを交わす……。
乙女のクリスマスはこうでなくてはならないだろう。
(でも、ねえ)
クリスマスまであと一ヶ月もないというのに、留美の周りである程度親しい男の子ときたら、それこそ型破りな性格の浩平くらいしかいない。
今日の一件などでも、手段を選ばず本気で助けてくれようという気持ちや、笑うと子供みたいにあけっぴろげなところも、そんなに悪くない気がしたが、どう考えても王子様という柄ではなかった。
ドレスで一緒に踊ろうなどと言ったら、正気を疑われかねない。
そもそも、乙女を迎えに来るのは王子様と相場が決まっているのだ。浩平が王子様ではない以上、それはどうしようもないことだった。
(今年は、無理なのかな……素敵な王子様が来るのは)
そんなことが頭に浮かんだが、留美はそれを打ち消すように頭をぶんぶんと振った。

あまり悲観的に考えていても仕方がない。ここまでうまくやってきたのだ。きっと乙女の道は開けているはずだ。

留美は沈んだ気分を振り払うように、大股で歩き出した。

「あ……綺麗」

数歩進んだところで、留美の脚は止まった。

ドレスだった。

きらびやかな、普段はとても着られないような豪華なドレス。光の加減で微妙に色合いが変わるような布地が、マネキンの体を覆っていた。

（こんなドレス着て踊りたいな）

値札を見ると、とんでもない値段がついている。六ケタの大台に入った衣装は、さすがに着たことがなかった。

留美はしばらくそのドレスを眺めると、何となく幸せな気持ちで帰路を歩いていった。

いつか乙女になれる日には、こんなドレスを着て王子様と踊れる。

そう信じながら。

第3章　冷たい痛み

その日は、転校してから初めての調理実習だった。
初めて入る調理室の中で、留美は五十音順につかされた席のところに教科書やノートを置くと、半ば進退極まった気分でエプロンや三角巾を身につけ始めた。
(う、うーん……まずいかも)
漏れそうになる溜息を必死でごまかしながら、エプロンの紐を結ぶ。
「どうしたの、七瀬さん」
同じ班になった瑞佳が、心配そうに留美の顔を覗き込んでいた。
「あ、大丈夫。ちょっと考え事してただけ」
笑ってごまかした留美の真意に気付くことなく、瑞佳はにっこり笑ってくれた。
(ああ、ごめん瑞佳! 嘘なのよそれはあっ)
心の中で留美は善意の瑞佳に謝った。
本当の悩みは、授業のカリキュラムにあった。
留美は料理の腕に関しては全く駄目なのだ。
何とか自分で作れるのはたったひとつ。転入直前に血の滲むような思いで特訓した、型抜きクッキーだけだった。
だから型抜きクッキーに関しては留美もかなり自信があったが、ご飯もの、包丁を使わ

なければならないものに関しては、非常に怪しかった。
何しろ、包丁の持ち方からして危なっかしいらしい。
クッキーの練習をしている最中でさえ、母は呆れながらこう言ったものである。
『留美、ナッツとかチョコとかチーズとか、刻む時にはお母さんの見ている前でやりなさいよ。あんたの手つきじゃ、絶対自分の手を切るから』
『それ、高校生の娘に言う台詞？』
『今時、小学生だってもっと上手に包丁くらい使います』
口を尖らせて言った留美に、母は厳かにこう言って新聞のテレビ欄を見せたものである。
そこには、留美でも知っている子供向けの料理番組の名前があった。
ぐうの音も出ない、というのはこのことだろう。
しかし、母の都合のいい時間にだけ練習していては、みんなが食べて『おいしい』と言ってくれるクッキーには程遠いのを知っていた留美は、プレーンなクッキーに対象を絞って作り続けたのだった。
これでキッチン関係で乙女路線が行き詰まることはない、と思っていたので、調理実習というのは盲点もいいところだった。
しかし、調理実習で大失敗をするなどというのは、乙女として思いきり間違っている、

というのは留美にでも解る。
今日は半日授業だ。
昼まで我慢すれば人気投票の結果が必ず出るのだ。何とかぼろを出さずに済ませたい、と思っていると、初老の先生がこう言った。
「今日は、次回の実習の前に、何種類かのだしの取り方を勉強してもらいます。次の時間には、このくらいのことはできるものとして、授業を行いますからね。班で分担して、かつおだし、昆布だし、煮干しのだしを比較します。みなさん、準備してくださいね」
包丁を使う必要はないと解ってほっとした留美に、何かが手渡される。
「七瀬さん、煮干しの頭とはらわた、お願いね」
煮干しの入った袋を差し出しているのは、広瀬真希だった。彼女の側には昆布が用意されている。
「あ、うん、解った」
留美はうなずくと、煮干しの袋を受け取った。
「広瀬さんのうち、お味噌汁って煮干しを使う？」
「うちは大抵煮干し」
「へえ、そうなんだ。うちは煮干しって、あんまり使わなくって」

留美がにっこりと笑うと、何故か真希は奇妙な顔をした。
「広瀬さん、どうしたの？」
「……何でもないわよ」
そう言うと、真希はキッチンばさみを使って昆布に切れ目を入れ始めた。
（へえ……あんな風にするものなんだ）
食事を作る手伝いなど、納豆をかき混ぜるくらいしかやったことのない留美は、真希の馴れた手つきに素直に感心しながら、自分の持っている煮干しの頭を引っこ抜き始めたのだった。

数種類のだしが出来上がると、それぞれのだしに味噌を投入したものの味を見ることになった。
コンロの前で、真希と瑞佳が数種類の味噌汁をよそって、各人の前に並べている。他の班でも同じような光景が展開されていた。
留美がぼうっとしていると、真希がお椀をひとつ差し出してくる。
「これ、煮干しのだし」
「あ、ありがと……」

真希は一瞬、ひどく冷たい視線を留美に投げたが、そのことを留美は気付かなかった。すぐ後に瑞佳が別のお椀を差し出してきたからである。

全部で三つのお椀に少量ずつ盛られた味噌汁を飲んで、味の比較についてレポートを書かなければならない。

留美はかつお、昆布と味見をしていって、最後に煮干しの味噌汁を飲んだ。

(何だか……苦いっていうか、えぐいっていうか。こういうものなのかな)

隣の席で同じように味噌汁をすすっている瑞佳に、留美は声をかけた。

「あのさ、瑞佳。煮干しのだしのやつ、ちょっとえぐくない？」

「そうかな。わたしはおいしいと思うよ。ちょっと好き嫌いがあるかもしれないけど」

「うーん、あたしが飲み馴れてないだけかもしれない」

七瀬家では、煮干しのだしは使わなかったから、馴れていないだけと言われればそういうものなのかもしれない。

そう結論付けて、留美は残りの味噌汁も全部飲んでしまったのだった。

片付けをして教室に戻ると、休み時間はほとんど残っていなかった。

女子の集団が、チャイムの鳴る前に教室になだれ込んでゆく。留美もまた、同じように

慌てて席についた口だった。
「お、七瀬。家庭科でいいもん食べたか？　何か残ってるならくれ」
「だしの比較よ。味噌汁ばっかり何杯も飲んだわよ。次の実習の為の実験だったみたい」
「まあ、七瀬にものを作らせるだけで充分実験だと思うが」
もちろん、机越しに足を踏んでやったことは言うまでもない。
「そう言えばお前、今トップだぞ」
「え、本当？」
「ああ、残りはあと三票。それが全て長森に入ればひっくり返るかもしれないが、多分、割れておしまいだ」
「だといいけどね」
そんなことを話しているうちに、次の先生が教室に入ってきた。

（早く、発表しないかな……）
厳しい乙女への道のりの為とは言え、やはりここ最近の日々は辛いものだった。
一生懸命頑張った。今の状態なら、昼まで馬鹿なことをしなければほぼ確実に入選するだろう。それにこれだけやって駄目なら、今はまだ乙女への精進が足りないのだと思い切

ることもできる。
どちらにせよ、昼が待ち遠しかった。
「……っ」
異変に気付いたのはその時だった。
突然、腹部に鋭い痛みが襲いかかったと同時に、腸から耳障りな音をたて始めたのだ。
（まさか……お腹をこわした？）
朝食で何か悪くなっていたのだろうか。
思い出してみたが、それらしいものを食べた記憶はなかった。何しろ今朝は、少し時間がなくてパンを食べただけだったのだ。カビでも生えていなければ、お腹をこわしようがないのだが、さすがにこの寒い時期にパンが怪しいとは考えにくい。
『おい、七瀬……』
後ろから浩平が小声で訊いてくる。
『話しかけないでよお……っ』
その前かがみの様子と声から、浩平は事情を察したらしい。更に声を小さくする。
『お腹の調子が悪いのか』
だんだん額に脂汗が浮いてきているのに気付いた。ひどく苦しくて、ただうなずくだけ

しかできなかった。
その時、ぐるぐると大きな音が鳴ってしまった。
「え？」
留美の隣にいる女生徒が、こちらを不審そうに振り向いた。
（まずい！）
苦しさと恥ずかしさとで、留美は瞼をきつく閉じるしかできなかった。
だが。
「ぐるるるる……」
浩平はその音を紛らわすように、低く唸り声をあげてみせていたのだ。
女生徒は、またこいつかと言わんばかりの表情で浩平を見やると、溜息をついて黒板の方に顔の向きを戻した。
『あ……ありがと、折原』
『おかげで授業中に、無意味に唸る変な人になっちまったけどな。それはともかく、トイレ行って来い』
『駄目……それだけは絶対駄目』
『保健室行くって言えばいい』

『そんな前かがみになって、足をすぼめて歩いてたらばればれだもん。そうなったら、あたしは学校で無節操にナニする無神経な女の子、ってことになって』

今のお腹の具合からすれば、どう考えてもまともに歩けるとは思えなかった。

明らかにトイレを我慢できません、と言わんばかりの歩みで教室を出て行けば、全員がそうだろうと思うに決まっている。

浩平もそれは想像がついたらしい。

『現状でそれをやっちまうと、残りの三票どころか今までの票まで撤回されるだろうな……。じゃあ、我慢し続けるのか』

留美がこくんとうなずくとほぼ同時に、再びお腹の音が鳴り始めた。

浩平が慌てて唸り声をかぶせたせいで、その無様な音は響かずに済んだ。

『俺に何かできることがあったら言ってくれ』

苦しさのせいで意識が半ば薄れそうになりながら、浩平の言葉にうなずく。

現状で意識を失えば、『学校で無節操にナニ』などと言うレベルではなくなってしまう。

それこそ二度と学校に来られない大恥をかいてしまう。

『折原、は……話をして』

『どんな』

『どんな話でもいい。この苦しみを忘れさせて……』
浩平は少し考えてからうなずいた。
『よーし、じゃあ、俺の好きな食べ物の話だ』
『うん』
力づけるような口調で、浩平は語り始めた。
『七瀬は納豆、好きか？』
『う……ん』
『カレーは好きか？』
どういう落ちになるのか解らないまま、おぼつかなげにうなずく。
『チーズは好きか？』
必死で薄れそうになる意識と戦いながら、顎を下げた。
『じゃあ、七瀬も好きになってくれるだろう。その三つを合わせたものが俺の好物なんだ』
カレー＋納豆＋チーズ。頭の中で機械的にその味を混ぜてみた。
『いや、これがうまいんだって。今度食いに行こうな』
強烈な匂いと味が口の中でぐるぐると回る。
ということは、そういう物体が浩平のオリジナルメニューではなく、あまつさえ店頭で

販売されている訳だ。

留美は猛烈な吐き気に襲われた。

口を押さえて突っ伏す留美の肩に、浩平はそっと手を置く。

『大丈夫か』

『胃にきたわ……おかげで、下の方の波が収まったみたい』

『油断するなよ。周期的にやってくるもんだからな』

時計を見るとまだあと18分残っていた。

留美は腹部から神経をそらすようにして黒板を睨んだ。

あと10分、という頃。

その苦しさはこれまでで一番ひどかった。ぎりぎりとさし込むように痛んでくる。

『もう……駄目かもしんない』

『馬鹿野郎！　堪えろ、七瀬。ここまで来てお前、諦めるのか!?　あれだけ必死で頑張ったんだろっ？』

ぐらん、ぐらん、と意識がどこかへ吸い込まれていきそうになりながら、留美は浩平の激励を聴いていた。

『ちょっとだけ、休ま』
ぱたん、と留美は机に突っ伏していた。

気が付いた時には、浩平に抱えられて廊下を歩いていた。
「よく頑張ったな。もうそこがトイレだぞ」
留美はすぐ近くまで浩平に運ばれ、最後の力を振り絞ってトイレに駆け込んだ。
一通り用を足してしまうと、いきなりお腹は楽になってしまった。まるで、今までお腹が痛かったのが嘘のようだった。
(あれ……？)
下痢の原因が食中毒なら、こんなにすっきりと痛みが引く訳がないのだ。
どちらかと言うと、これは、薬を飲んだ時と同じだった。
(まさか、ね)
水を流して臭い消しをスプレーすると、留美は扉を開けた。

「大丈夫だったか？」
トイレから少し離れた場所で浩平は待ってくれていた。

「うん、おかげさまで。でも、何かおかしいのよ。食あたりだったら絶対こんな風にすっきりしないもん。下剤飲まされたみたいな感じ」
「そりゃ、お前の腸が強靱過ぎるだけだ。ナイフで切断したって一日でくっつきそうだからな」
「くっつかないっ！」
さっきまで親身になって気遣ってくれていたのが嘘みたいに、浩平は間抜けな憎まれ口を叩いてくる。
蹴飛ばしてやろうかと思った瞬間、浩平がにっと笑いかける。
「何にしろ、人気を損うようなことにならなくてよかったな」
「ま、そうね」
少し拍子抜けしながらも、留美は浩平に笑い返した。

次の授業が始まって間もなく、いきなり浩平が立ち上がった。
「よっしゃあああっ！　七瀬っ、やったぞおっ！」
そう叫ぶと、いきなり後ろから髪の毛をぐしゃぐしゃかき回される。
「こらあっ、折原っ。何をしとるかっ！」

「あ……すみません」
頭を下げて浩平が再び席に座る。
留美は恥ずかしさで真っ赤になりながらも、どうやら自分がトップを取ったらしいこと、浩平がそこまで喜んでくれることが嬉しかった。
留美はむずむずするような、奇妙な嬉しさを堪えて授業が終わるのを待った。

「折原、ありがとね。あたし、一位だったんでしょ」
「ああ」
「何だか疲れたけど、楽しかった。またこの次もあったら協力お願いね」
「やなこった」
そう言いながらも浩平は笑っている。
こんなところにも留美は馴れてきたようだ。それに合わせて憎まれ口を叩いてやる。
「ま、あたしひとりでも結果は同じだったかも知れないけどさ」
気が付くと教室の中からは、大多数の生徒がいなくなっていた。土曜日だからみんなは早めに帰ってしまったのだ。
そろそろ帰る頃合だろう。

「じゃ、折原。またね」
「ああ、また来週な」
手を振り合うと、留美は教室から少しだけ浮かれた気分で立ち去った。

●　●　●

気持ちよく体が動くこと。
竹刀の先までちゃんと意識がいって、踏み込んでゆけること。
その為のパワーも、速さも。
ごく些細だと思ってたことが、それこそいきなりなくなった。
故障だって、今までなかった訳じゃない。
だから、これが最後だなんて思ってなかった。
剣道は、あたしにとって唯一のものだった。
たったひとつのあたしの本気だった。

だから、あたしはすがっていたのかもしれない。
自分のやれることを代わりにやってくれる、剣道部のみんなに。
あたしはぼろぼろに疲れていたんだと思う。
「もう面なんて被るな。違う人生を生きろ。髪を伸ばして、リボンをつけろ。そうすれば違う幸せがおまえを待ってるよ」
最後に先輩が言ってくれたその言葉は、あたしをもう叶わない夢から解き放ってくれた。
きっとそこに、何かがあるんだ。
その時にはまだ、そんな小さな予感しかなかった。

●
●
●

それから数日間の留美は、狂乱のイベントが終わった後、至極穏やかな日々を送ることができた。

「七瀬、飯食おうぜ」
留美が何か返事をする前に、浩平は自分の机を留美の机と合わせてきた。
購買で買ってきたらしいパンとお茶を広げて、留美のランチボックスを覗き込む。
「お、うまそうな卵焼きだなあ。もらいっ」
「あぁっ」
綺麗に巻いてある厚焼き卵は、留美の好きなメニューだった。自分でも作れたらいいと思ったことも何度かあるが、これだけ繊細に渦巻き模様かできた厚焼き卵を作る自信はなかったので、おとなしく母のお手製を食べている。
少なくとも今まで食べた厚焼き卵の中で、母の作ったものよりおいしいと思ったことはなかった。
それを、浩平はあっさりと指でつまんで持って行ってしまった。
「おっ、甘くてうまいな」
「何するのよ、馬鹿あっ。あたしも楽しみにしてたのに」
「じゃあ、代わりに集めてもらえる高級ディィッシュ応募券一枚をやろう」
「いらないわよ。だったら、そのウィンナー一本ちょうだい」
「これをやったらウィンナーロールが単なるロールになってしまうじゃないか」

牧歌的とも言える間抜けな会話を続けていると、瑞佳がにこにこ笑いながらやってきた。
「あ、楽しそう。入れてもらっていい？　おかず取っ替えっこしてるんだ。わたしもあげる」
どうやら気になって遊びに来たらしい。
瑞佳も空いている机を移動してきて、自分のランチボックスを開けた。すこし食べた痕がある。そこからシューマイをつまんで、浩平のパンの袋に乗せてやっている。
「そいつに何かやっても、何も返ってこないわよ」
「俺がそんなけちなものか。代わりに集めてもらえる高級ディッシュ応募券一枚をやろう」
「いるかっての！」
どこの若い女の子が、そんなおばさん臭いものをもらって喜ぶのか。留美はパンに付いたシールを剝がしている浩平に文句を言った。
しかし、瑞佳は何と嬉しそうにうなずいたのだ。
「あ、高級ディッシュ欲しい。浩平にもっとおかずあげたら、たくさんシールくれるかな」
「マジ……？」
「そのシールの付いたパンは今日は一個しかなかったから、それで終わりだ」
「そうなんだ。残念。あ、七瀬さんも何か交換しよっか」

瑞佳は楽しそうに自分のランチボックスの中を見つくろい始めた。
（折原の女性観が歪んでるのは、絶対瑞佳のせいだわ……）
浩平の馬鹿な言動を馬鹿だと思わず、嬉しそうに応対する瑞佳は、筋金入りに善意の女の子だ。しかし世の中の、瑞佳以外のほぼ全員の女性が浩平の言動に堪えられる訳ではない。
瑞佳のようにほとんど天使並みのやさしさと、仏様並みの忍耐力を持ち合わせているのが、女の子のデフォルトだと思っていたら、これからきっと、まともに恋人ができることはないに違いない。
（あたし、よくこんな凄い子に勝てたわよね……）
留美は心の中で溜息をつくと、瑞佳と交換するおかずをチェックし始めた。
浩平や瑞佳と昼食を食べるようになって数日で、学校のある中崎町にもすっかり馴れてきていた。
この調子でクラスにも馴染んでゆける、そう思いながら平和な日々を過ごしていた。
しかし、それはごくわずかな休息時間だった。
その終わりは、小さな画鋲（がびょう）だった。

椅子の上に乗せられているその画鋲は、ごく当たり前の、後ろの掲示物などを貼りつける為のものだった。真新しいそれは、朝陽を受けてちかちかと光っている。

（何、これ……）

朝早く登校してきて、留美がその画鋲を見つけた時、他にはほとんど生徒はいなかった。よく見ると壁に貼られたプリントが、いくつか新しいものに変更されている。その時に落ちたのだろうか。留美はしばらく首をかしげていたが、やがてその画鋲を持って後ろの壁に刺しに行った。

ぎゅっ、と壁にめり込む感触が、何故か嫌だった。

そのまま留美は、何となく画鋲のことを忘れ果てていたが、翌日、嫌な形で思い出すことになる。

画鋲はもう一度、留美の椅子に置かれていたからだ。

しかも、今度はきっちりと中央に据えられ、悪意の存在を訴えているようだった。

それが三日も四日も続くと、さすがに薄気味悪くなってきた。

始業近くになってもずっと立ち尽くしている留美に、期末テストだと言うのに相変わらず遅刻寸前で教室に滑り込んできた浩平が声をかける。

「七瀬、どうかしたのか？」
「見てよ、これ……」
留美は画鋲を指差してみせる。
「痛そうだな。座ったのか？」
「座ってたら今頃こんなところに立ってないわね」
「こんなもの、どければ座れるだろう？　偶然そのへんから落ちたんだろ？」
留美は眉をひそめてみせた。
「あんたの席ならいざ知らず、偶然こんな場所に画鋲が落ちる訳ないじゃない。事件よ、これは。悪意を持った行為。誰かがあたしのことを殺そうとしてるんだわ」
「画鋲でか？　かなり無理があると思うが」
「でも、狙われてることは確かかね。だって……」
留美の言葉は、途中で先生が入って来たことで遮られた。
慌てて席についた留美が、椅子から画鋲を取り除けるのを忘れていたことに気付いたのは、それから一瞬後のことである。

一時間目のテストが終わってから、留美は浩平と廊下に出た。

「お前の考え過ぎじゃないのか？」
「だって、今日だけじゃないのよ。ここ何日か毎日置かれてあるんだから。何だか最近、こういう危険にさらされることが多いのよ。何かがあたしの知らないところで起きてるんだわ……」
「お前、昨日のサスペンスドラマ、観ただろ」
最近売れているらしいサイコ系小説をドラマ化した人気番組を、確かに昨日観たが、それとこれとは話は別だ。
「ねえ、こんなことあなたに頼むもんじゃないとは思うけど、お願い。この事件の犯人を突き止めて」
浩平はあまり信じていないようだったが、根負けしたのか苦笑しながらうなずいてくれたのだった。
「まあ、俺にできるのはせいぜい聞き込むくらいだけどな。で、そいつを突き止めたら見返りとかあるのか？」
「ええっ、そんなの親切でやってよ」
「お前、中途半端に現実的だよな。大概ドラマではな、女学生と探偵は事件を紐解いていくうちにだな、恋に落ちてゆくものなんだぞ」

「え？」
思わずどきっとするような発言だったが、浩平の言葉はまだ続く。
「それでチャンネルを変えられそうになる十時手前で、濡れ場に突入しそうになったりとかするとさ、だから、それで……いやでも待てよ？」
「馬鹿あっ！　そんな心配しなくていいのっ。現実なんだから誰もチャンネルなんか変えないのっ」
留美からの攻撃を食らってよろよろと教室に戻った浩平は、やがて瑞佳を連れて戻ってきた。
「浩平、どうしたの？　あれ、七瀬さんも」
これ以上殴られてはかなわない、と思ったのか浩平は真剣な顔で問い質した。
「長森、最近七瀬の周囲をうろつく不審者を見かけないか？」
「ああ、いるかも」
瑞佳は何故か当然のようにうなずいた。
「何？　俺の眼を逃れてそんな大胆な行動を取っていた奴がいたとは……どんな奴だ」
「うーんとね、変なひとだよ。いっつも人が予想できない行動ばっかして、七瀬さんにちょっかいばかりかけて困らせたりしてる」
留美にはそんな人物が浩平以外にいたとは考えられなかった。

くすくすと笑いながら、瑞佳は言葉を続けた。
「わたしが思うにね、そのひとは七瀬さんのことが好きなんだよ。ほら、子供って好きな人に嫌がらせしちゃうじゃない？」
「あ、あの瑞佳……」
留美が力なく言葉を挟もうとしたが、瑞佳の意図が解らない浩平が口を開いた。
「ガキだなそいつは。好きなら好きと告白して、そのまま砕けてしまえばいいのに。大方七瀬に群がってた奴らの一人だろう。で、誰だそいつ」
「浩平」
留美が頭を抱えている間に、浩平は呆気にとられた表情でしばらく瑞佳を見ていた。
「ほら、告白して砕けるんでしょ？」
浩平がどう思っているかはさて置き、現状に対して瑞佳は果てしない勘違いをしているようだった。
「あのさ、瑞佳……そうじゃなくて」
思いきり脱力した留美は、画鋲の話を手短に話した。
そこでさすがに瑞佳も真剣な顔になった。
「ほんとに嫌がらせじゃない、それって。そこまでは浩平、する訳ないよ」

「だから、長森。お前も怪しい奴について聞き込みを手伝ってくれ。ずっとこんなことが続くなら、さすがにやばい」
「うん、そうだね。次の休み時間に訊いてみるよ」

そろそろ休み時間が終わる頃だった。
三人は結局付け焼刃のヤマかけもすることなく、そのまま試験を受けることになった。
次の時間、瑞佳も浩平も熱心に聞き込みをしてくれた。
「俺の方は不発だった」
がっくり肩を落としながら浩平が報告する。
「どうも七瀬のファンに山ほど恨まれてるらしくって、俺への罵倒しかなかったぞ」
多分、ここ最近浩平と行動を共にしているせいだろう。
「わたしの方もあまり変わらないよ。十人中九人が浩平の名前を挙げてたもん」
「残り一人は？」
「広瀬真希さん」
留美は、胸の中でちりっ、と棘が動いたような気がした。
ほとんど喋ったことはないが、時々見せるひどく冷たい表情には、それを納得させる要

素が隠されているような気がした。
浩平が自信ありげにうなずく。
「そいつだ。火のないところに煙は立たぬって言うからな」
「でも、他の全員に怪しいと思われてる人が、そんなこと言ったら失礼だよ」
「俺のは誤解だ。とりあえず、一人とは言えマークしやすくなったのは事実だな。七瀬、今日の試験が終わったら途中まで送ってやるからな」
「え……うん」
留美は浩平の言葉をぼんやりと聴いていた。

広瀬真希。
しっかりとした姉御肌の真希は、どちらかと言うと転校前の留美に似ているところもある少女だった。
調理実習の時のてきぱきした手つきを思い出す。
彼女が、あんな嫌がらせをするのだろうか。
転校早々の自分がそこまで嫌われているのだろうか。
考えているとだんだん辛くなってきた。

人に嫌われるというのは、やはり辛いものだ。かつてのように『鬼部長』でなくなっても、乙女になれるように努力して、何とかそれらしくなってきても、嫌われるという点では変わらないのだろうか。

どうしたらいいのか解らなくなってきていた。

第 4 章　壊れたクマ

瑞佳と教室で別れ、留美と浩平は廊下を歩き出した。
「あのさ、折原……」
「ん？」
嫌われるって、折原だったらどんな気持ち？　そう訊こうとしたが、言葉の続きが出てこなかった。
言葉に詰まって何となくうつむいた留美に、浩平が笑いながら言った。
「七瀬、何か食ってくか？　あの例のカレーとか」
「げっ、絶対いやっ！」
「あれ、うまいんだぜ。マジで」
「それはあんただけよ」
浩平と馬鹿な話をしていると、気分が少し楽になってきた。
（こいつって変な奴だけど、絶対、ムードメーカーよね）
本人は絶対意識している訳ではないのだが、浩平は他人の気持ちを楽にしてくれるようなところがある。
落ち込んでいる時には格好の相手かもしれない。
「あんたさ、瑞佳と遊ぶ時にもそんな不気味なものばっかり食べさせてる訳？」

「まだカレーは長森と行ってないな。今度連れてってやろう」
「……やめときなさい。女の子を連れてったら生涯恨まれるわよ」
「でもさ、あいつは結構つきあいはいいぜ。割と幅広い種類を網羅できると見た」
どうやら浩平は他人がその食べ物を好きかどうかは考えないらしい。
お腹をこわした件ではそれに助けられたとは言え、これから友人としてやってゆくにも、多少覚悟しないとまずい部分だろう。
とりあえず、有無を言わさずカレー屋に連行されないうちに、話を変えたかった。
「そうだ、折原はテストどうだった？」
「いい訳ないだろ。せっかくの貴重なテスト勉強の時間を割いて聞き込みしてたんだから」
「ごめん……って、あんた他の時間にはちゃんと勉強してなかったの？」
「いや、勉強はするつもりで机につくんだけど、気が付いたら朝になってるんだ」
「折原らしいわ」
留美は溜息をついた。
「そう言えば七瀬、お前、部活は何にしたんだ？」
「まだ決まってない。色々回ったんだけどね」
「そうか。じゃあ今度俺が付き添いをしてやろう」

「お断わり。あんたと回ったんじゃ神経が保たないわよ。あれ？　折原は何か部活に入ってるんだった？」

「軽音楽部。誰もいないから行ってないんだけどな」

そんな部活があっただろうか。留美はもらった部活の案内を思い出したが、軽音楽部があった記憶はなかった。よほど印象が薄かったのかもしれない。

いくつか開店休業状態の部活があったから、そのひとつだろう。

商店街に差しかかると、賑やかなクリスマスメドレーが流れてきていた。

「クリスマスの商店街ってさ、何だかいいよね」

いつもとは違うきらびやかな飾りをほどこされて、少し澄ましているような感じがする。

普段より背伸びしてお洒落しているところが、可愛く思えてくる。

今まではそんなにクリスマスというイベントが好きだった訳でもなく、何となく友達と騒いだりするだけの日になっていたが、今年こそはきっと、素敵な王子様にエスコートされて歩けるのだ。

そんな夢見がちな留美の思惑を知るはずもなく、浩平も嬉しそうにうなずいた。

「確かにな。やっぱりちょっといいもん食えるし。運がよければ長森にパーティ料理とかの余りを支給してもらえるしな」

「家ではクリスマスに何か作ってくれないの？」
「一人暮しみたいなもんだからな。一応、叔母さんの家に住んでるけど、あの人、仕事で忙しいし、自分の家でクリスマスパーティをしたことは小学校の頃以外なかったな」
「へえ……」
普段型破りなだけに見える浩平に、そんな部分があったと言うのは意外だった。
そんなことを話しているうちに、商店街を抜け、道を曲がるところに差しかかった。
「あ、折原、あたしここだから」
「じゃあな、七瀬」
「あ……折原」
手を振ろうとした時、留美は浩平を呼び止めてしまっていた。
「うん？」
向かい合ってしまうと妙に照れてしまうが、留美は笑いながら言った。
「えっと……ボディガード、ご苦労様っ」
一瞬戸惑ったような表情を浮かべた浩平は、すぐに納得したらしく笑い返す。
「気ぃつけて帰れよ。ここからは俺の管轄外だからな」
探偵もののドラマのように芝居っ気たっぷりの様子でそう言ってみせると、手を振って

去って行った。

（広瀬さん、か……）

一人になったところで、留美は溜息をついた。

時折、冷たい眼でこちらを見ていたことを、今になって思い出す。

特別に恨まれるようなことをした記憶もない。そもそも、大して喋ったこともないのに、どうやって恨まれるというのだろう。

しかし、留美は自分が大きな見落としをしていることに全く気付いていなかった。

かつての自分と似たタイプの少女にとって、今の自分がどう映るのか。そして、今の自分をかなり無理をして作っていることが他人にどう見えるのか。

この時に留美は真剣に考えておくべきだったのだ。

しかし、留美は気弱に首を振ってしまう。

（でも、広瀬さんって絶対悪い子じゃないと思うし、ほんとに彼女がやったとは限らない訳だし、いつか……仲良くなれるわよね）

そのせいで留美は多くの傷を負ってしまうことになるのだった。

そのことをまだ、留美は知らない。

翌日には椅子に画鋲は落ちていなかった。
(よかった……終わったんだ)
留美は思わずほうっと息をついた。
「七瀬、おはよう」
気が付くと、いつもは遅刻ぎりぎりの浩平が仏頂面で座っている。
「おはよう、折原。珍しく早いじゃない」
「ちょっといつもより早めに出てきたんだけどな。俺が登校した時にはもうあった」
机の上に転がしてあるものを浩平は指差した。
いつもとは違う画鋲に留美は思わず顔を強張らせた。
画鋲が乱暴に剝がしたセロテープに刺さっていたのだ。どこかに貼り付ける為に細工したものとしか考えられない。
もちろんそれは、留美の椅子以外に有り得なかった。
抑揚のない声で留美は訊いた。
「折原が、剝がしたの？」
「ああ、背中のところに貼ってあった。お前が来るまで放っておくと、絶対そのまま座る

からな」
「そんなこと……」
うつむいた留美に、浩平は厳しい表情で言った。
「エスカレートしてきてるぞ。椅子に転がしておくだけなら洒落で済んだかもしれないけどな、ここまできたらちゃんと本気で自衛手段を考えないとやばいぞ」
留美は言葉が出なかった。
ここまで明確な悪意にさらされたことなど、今まで一度もなかった。そんなに恨まれなければならない理由にも心当たりがないことで、余計に不気味だった。
「あたし……こんなことされなきゃいけないほど、悪いこと……した？」
「悪いことをしたかどうかは案外問題じゃないんだ。俺もガキの頃にやったけど、相手が困ると楽しくなるんだよ。今思うと長森と友達でいられてるってのは、半ば奇跡みたいなもんだよ。だけどな、今回は多分それよりひどいぞ。悪意からくるいたずらってのは、飽きれば止むものでもないしな」
「どうして？　折原が瑞佳と仲良くなれたみたいに、仲直りってできないの？」
浩平は小さく首を振ってみせる。
「それは単に長森があいう性格だからだ。今回、もしこいつの黒幕が広瀬でなくても、

女だったらまず複数でやってるもんだ。何人かでやってればエスカレートするのも早いし、後戻りもきかないぞ」

留美はぞっとした。

「折原……」

「気をつけろ」

留美がうなずく前に、教室に先生が入って来た。

どことなく強張った表情のままで、留美は前を向いた。

「今日は長森に途中まで送ってもらってくれ。俺は用がある」

テストが終わってから、浩平は瑞佳のところに留美を引っ張ってくると、どこかに行ってしまった。

「瑞佳、ごめんね……」

「ううん、こんな時こそ助け合わなくちゃ。ちょっと待っててね。佐織達に断ってくるから」

包み込むようにやさしい表情で、瑞佳は笑いかけてくれた。

留美はやさしくされているのに何となく泣きたくなってしまい、鼻のあたりがつんとし

て痛かった。
しばらくすると瑞佳は小走りで戻ってきた。
「じゃ、帰ろうか」
二人は鞄を下げて教室を出て行った。

帰り道、瑞佳は心配そうに話しかけてくる。
「七瀬さん、あんまり気にしちゃ駄目だよ。気にすると、余計に面白がってやってくると思うから」
「うん……でも、何だか考えすぎちゃってさ。あたし、何か悪いことしたのかなって」
沈んだ声を出す留美に、瑞佳はしばらく首を傾げて答えを出した。
「どうなんだろう。わたし、七瀬さんは悪くないと思うよ。ただ……」
「ただ？」
「転校してきて間もないのに凄く目立ってたから、それに嫉妬してる人もいるのかもしれないね」
「嫉妬、か」
瑞佳は元気付けるように笑ってみせた。

「でも、きっと大丈夫だよ。浩平もいろいろ頑張ってるみたいだし、結果が出てみないことにはどうにもならないもんね」
「そう……だよね」
「浩平、ほんとに七瀬さんのこと大事にしてるみたいだから、ちょっと変なとこあるけど、これからもよろしくね」
「それは瑞佳の勘違いだって……」
留美は何となくそこで言葉を詰まらせてしまった。
人気投票でトップを取って住井に昼食をおごってもらえば、留美のことを助ける必要などどこにもないのに、何だかんだ言いながら助けてくれる浩平に対して、当然ながら感謝は大きかった。
それどころか、まだ女子の親しい友達ができない留美にとって、一番親しい相手と言えるだろう。
そういう相手を、何でもないと切り捨ててしまうのは、恋愛と関係ないとしても心理的に抵抗があった。
「まあ、あいつの変なとこは筋金入りだけど」
留美は瑞佳と別れてからも、何となくむずむずするような気持ちで浩平のことを考えて

いた。

翌朝。

廊下を歩いていると、教室からざわざわと話し声が聴こえてくるのに気が付いた。

(何かあったのかな)

教室の扉を開けた瞬間、留美にいくつもの視線が突き刺さる。

「あ……っ」

「七瀬、見るな」

黒板消しを持った浩平が、低い声で注意する。

しかし、遅すぎた。

大きく書かれていたその文字は、留美の眼にしっかり入った。

七瀬留美は誰とでもヤる

留美は一瞬、眼の前が真っ暗になったような気がした。

怒りの余り、叫び出しそうになるのを堪えて、廊下に走り出る。

「住井、消しておいてくれ」
黒板消しを住井に押し付けて、浩平が追ってきた。
「おい……泣くな」
「ぶ、ぶっ殺してやるううっ!!　どこの誰があんなことしたのよっ」
どうやら留美が泣いているのかと心配してきたらしい浩平が、がっくりとうなだれる。
「怒りに震えてたのか……まあ、それはともかく、落ち着けよ。こんなストレートな手で出てきたからには、さすがに犯人は特定しやすいと思うぞ」
「そうね」
少なくとも今度の事件では画鋲を貼るのと同じ数秒で事足りているはずもない。黒板にあれだけでかでかと書き殴っているのだ。
誰かに見られている可能性は高いだろう。
「とりあえず、落ち着いてテストを受けろ。休み時間に聞き込みしてやるから」
「……う、うん」
確かに、テストをないがしろにする訳にもいかない。
浩平の言うこともっともだった。

「広瀬真希だ」
その日のテストが全て終わり、教室に人気が少なくなってから浩平は切り出した。
「ど……どうして？」
真希のことを悪く思いたくないせいで、何となく素直に信じられない。
「朝の食堂で、広瀬達のグループが楽しそうに喋ってるところをバスケ部の長谷川が見てるんだ」
「長谷川、って誰？」
「廊下側から二列目の後ろ、でかい奴いるだろ」
確かにそのあたりの席に、長身ののっぺりした顔の生徒が座っていた記憶がある。
「でも、ただの偶然かもしれないし……」
「本人も認めてる。全く反省の意志なしだ。よそから入ってきた人間が当然受けなきゃいけない洗礼だとか、こんなのない方が不思議だとか言ってる」
「もしかして、あの人気投票の結果とか、出回っちゃってるのかなあ」
「まあ、あれだけ男連中が騒げば、無理もないけどな」
浩平も瑞佳と同じことを言っている。やはり誰が考えても同じ結論に辿り付くらしい。
留美はふうっ、と溜息をつくと、軽く笑みを作った。

「でも、相手が解ったんだから努力してみるかな」
「やめとけ。はなから解り合う余地なんてない」
「でも、このままっていうのも嫌じゃない。何か歩み寄れる方法って多分、あると思うし」
わずかに眼をそらした浩平が、いつもより真剣な顔をしていることに留美は気付かなかった。
浩平は少し間を置いてからわずかに笑う。
「じゃあ、とりあえず、俺の任務は終わったかな」
「うん。ご苦労様、探偵さん」
「依頼人との間に恋は生まれなかったけどな」
「まだそんなこと言ってるの？」
留美はぷっと吹き出した。
「まあ、後は頑張れよ」
「ありがとね、折原」
そのまま二人で廊下に出た時、留美は足を止めた。
「あれ……？」
「どうした」
浩平にとってこの件は、今日の報告で終わったのだ。

何もなかった時のように、二人別々に帰ればいい。
「じゃあ、一緒に帰る必要なんてなかったんだ」
「まあ、今日くらいはいいんじゃないか？」
「明日からは……別になるのね」
当然のはずなのに、留美は何故かひどく寂しかった。
この、型破りで、今までいろいろ悩まされているはずの浩平が側にいなくなると考えると、何となく物足りないような、奇妙な気分になった。
(明日にでも広瀬さんと仲直りすれば、折原に面倒かける必要なんてないのに)
少し沈んだ表情を見て、浩平は笑いかけた。
「そうだ。腹減ったろ？　何か食ってこうぜ」
「そうね、ちょっとお腹減ったかも」
「じゃあ、あのめちゃくちゃうまいカレーをぜひ七瀬にも食わせてやろう」
とんでもないものを提案され、留美はぎょっとした。
「げっ、甘いものにしない？　折原は甘いものは駄目なんだっけ？」
「いや、俺は甘党だ。このへんの甘いもの関係の店は、ほとんど網羅してる自信があるぞ」
「あっあっ、どこかいいとこ教えてよ」

「そうだな。カレー屋はちょっと遠いし」
浩平は首を傾げながら、知っている限りの店を教えてくれた。
甘いもの談義で盛り上がりながら、二人はほとんど人気のない廊下を歩いて行った。

中華系の甘いおやつを売っている店でケーキを食べた後、今まで二回ぶつかったあの曲がり角で浩平と別れた留美は、真希と仲直りする方法を考えながら歩いた。
明日はテスト最終日。午後からみんなは打ち上げに繰り出すだろう。
その時に一緒に遊ぶ、というのが一番いいような気がした。
(でも、どうしたらいいのかな。ただ入れて、って言ったからって、そのまま仲間に入れてくれるとは思えないし)
誰かに嫌われているというのは辛い。
その相手が、かつての自分と重なるタイプの少女だとしたら尚更だ。
転校初日、真希は学校に馴れない自分に話しかけてきてくれた。今度は自分が歩み寄る番だと留美は思った。
(あたしの、できること)
空に上った月を見上げながら歩いていると、だんだん肌寒くなってきた。

留美は大きく息をつくと足を速めた。
最終日のテストは自信のある教科だけだったのが幸いした。でなければ、留美はその夜まともに眠ることもできなかっただろう。
「で、できた……」
深夜のキッチンのテーブルで、留美は脱力した笑みを浮かべて突っ伏した。
一番お気に入りの、テディベアの型抜きクッキーが、まだ網の上でほんわりと湯気を立てている。まだ焼き立てだった。
やかんからしゅんしゅんと音が立ち始める。
留美は慌てて立ち上がると、やかんの火を止めた。
ティーパックを入れてあるカップに、湯を注いで紅茶の色が出るのをじっと待つ。
(おいしくできてるとは思うんだけど)
留美はちらり、とクッキーを見つめた。
同じ顔をした何匹ものテディベアが、留美のことを見つめ返す。頃合を見てティーパックを引き出して捨てると、まだ温かいクッキーを二、三枚小皿に取った。
一枚を口に運んで、ぽり、と噛んだ。

今まで何度か作った中で、一番おいしくできていた。
(これなら、広瀬さん達もきっとおいしいって言ってくれるよね)
甘すぎず、歯ざわりも程よくできたクッキーを食べながら、留美は冷めて湿気が飛ぶまでずっとキッチンで待っていた。
しばらくしてから、可愛い巾着型のラッピング袋にクッキーを積めると、やっと自分の部屋に戻ったのだった。

テスト最終日。
クッキーを持って半ばそわそわしながら教室に入ってきた留美は、自分の椅子を見た瞬間、思わず凍り付いてしまった。
腰掛けの部分も背もたれも、一面にきらきらと輝く画鋲で埋め尽くされていた。
「おうっす、七瀬……おい、それ」
立ち尽くしていた留美の側に、いつの間にか浩平が立っていた。
鞄を持っているところを見ると、今来たばかりらしい。
留美が視線を向けているものを見ると、浩平の顔が強張った。
「うん……」

この時ばかりはさすがに泣き出しそうな気分だった。
女の子らしく丁寧に、びっしりと貼り付けられた画鋲。こんなことをする為に、テスト最終日の早朝に集まってまで、留美に嫌がらせをしたかったのだろうか。
「このまま髭に突き出してやるか？　それも手だと思うぞ」
浩平の強い視線をなだめるように、留美はゆるゆると首を振る。
「いい。取る」
「じゃあ、俺も手伝うぞ」
浩平は自分の鞄を机に置くと、留美の側にかがんで隅の方にある画鋲を取り始めた。ある程度最初に取っていかないと、指を刺してしまう。
まとめてテープを剥がせる椅子の部分が露出してから、そろそろとテープを剥がしてゆく。さすがにひとつひとつ貼り付けたものではなかったので、ここまで進めば撤去するのはすぐだった。
「ありがと、折原」
半ば憔悴（しょうすい）しながら、留美はぐちゃぐちゃとセロテープを丸めて壁際に放り投げている浩平に微笑んだ。
「本当に、髭に言わなくてもいいのか？」

「大丈夫」
もし、これが真希のしたことなら、担任に通告してしまえば二度と仲直りの機会は巡ってこないだろう。
そう思うと、沈黙を守るしかない。
きっと後で考えれば、馬鹿馬鹿しい思い出だと笑えるようになっているはずだ。
無理やりそう考えることで、留美は叫び出したい衝動を抑え込んでいた。

実際のところ、肝心のテストの方は半分おざなりに受けていた。それこそ得意科目でなければ、後で悲惨な目に遭っているところだ。
真希と話そう。
留美の頭の中にはほとんどそれだけしか頭になかった。
「終了！　答案を回収するぞ」
担当の教師の声を合図に、後ろから浩平の答案が回されてきた。
それに留美の分も重ねて前の席に送る。一番前の席まで届いた答案を教師が回収すると、早々に扉を開けて廊下に出て行った。
扉が閉められた音が響くと、その一瞬後、生徒達の間に歓声が轟いた。

「やったーっ」
「どこの店行く？」
生徒達は嬉しそうに打ち上げの相談を始めていた。
「うーし、七瀬。今から内輪で打ち上げでもしようぜ」
開放感溢れる表情で、早々に鞄を持っている浩平が声をかけてきた。
「ごめん。別のところとするから」
「そうか、そりゃ残念」
留美は趣味のいい紙袋に入れたクッキーと鞄を持って立ち上がった。
廊下側の一番前の席。真希の席はそこだった。
もう何人もの取り巻きの女生徒が周りに集っている。
「ねえ、真希。今日はどうする？」
「そうね、カラオケ行こうか」
留美がその輪に近寄ってくるのを見て、真希以外の女生徒はどこか緊張し、むっとした表情になっている。
それでも、真希の顔に浮かんでいるのは『笑み』だった。
留美はそのことだけを拠り所にして、話しかける勇気を出した。

「あのさ……広瀬さん」
「あら、七瀬さん。どうしたの？」
「あの、これからどこかに行くんでしょ？　一緒に行ったら駄目かな？」
真希達の間に、一瞬、しらっとした沈黙が流れる。
留美は精一杯人懐っこそうな笑みを作り、言葉を続けた。
「ほら、クッキー焼いてきたんだよ。みんなで食べようよ。まずかったらごめんだけど、あははっ」
笑っているのに、何故か違和感があった。
むっとした取り巻きの女生徒達、その中でただ一人笑っている真希。留美はひどく居心地悪い何かを感じていた。
うんざりするほど長い沈黙の後、真希が口を開く。
「クッキー？　貸して」
「どうぞ」
可愛いラッピング袋を開いて、真希に渡す。
真希はその中からくま型のクッキーを一枚取り出した。
「クマさんだって。だっさ」

真希が笑ってみせると、その一瞬後に揃えたようなタイミングで失笑が取り巻きから漏れる。
この段階で、留美は本当なら真希をひっぱたいてクッキーを取り返しておくべきだったのかもしれない。しかし、その代わりに留美がしたのは、消えてしまいそうな笑みを無理やり浮かべ直すことだった。
「やっぱクマさんは、ださかった？　でも味はいけると思うよ」
「ふぅん」
真希がぱりん、とクッキーをかじる。
まともに味わってさえいなかっただろう、というのは、留美にも解った。
「まっず」
そう言うと、口からクッキーを吐き出してみせ、残りのクッキーのかけらを投げ捨てた。
店で売られているクッキーほどではないかもしれないが、かなりいい出来のクッキーのはずだった。ほとんど血みどろで練習しただけあって、母も誉めてくれていたのだ。
こんな形で反響が返ってくるとは想像していなかったのだ。
「……え」
「返すわ」

真希はぽうん、と留美の胸に向かって袋を投げつけた。
しかし、それは留美の腕で受け止めるには近すぎたのだ。胸のところにぶつかって、軽くはね返る。
腕を伸ばしたが、それは一瞬遅かった。
カシャアッ
まだ開いたままのラッピングペーパーの入口から、あどけない顔のテディベアがいくつもいくつもこぼれ出てきた。
「うぐ……っ」
心機一転してこの学校でずっと頑張ってきたこと。
乙女になれば、きっと何もかもうまくゆく。
前の『鬼部長』だった時の辛かったことを忘れて、幸せになれるのだと思っていたのに。
精一杯乙女を目指した結果はこれだったのだ。
乙女も、これからのことも、もう、どうでもよくなってきた。
誰も救ってくれる王子様のいない乙女は、ただ悲惨なだけだ。それに一人甘んじて生きるのはもう無理だった。
「い……い……」

いいかげんにしてよ！
そう叫ぼうと口を開けた時。
「いいかげんにしやがれえっ!!」
教室中に留美のよく知っている人物の声が響き渡った。
「おりはら……」
息を荒立てた浩平が、つかつかと留美達に近付いてくる。
何が起こっているのか、留美にはさっぱり理解できていなかった。それは、もう片方の当事者である真希も同じだっただろう。
浩平はすぐ側まで歩いてきて、クッキーを手早く拾った。
そして、かがんだ身を起こし、いつも通りに話しかける。
「うーし、七瀬。カラオケでもいくか」
あまりにも普段通りの口調に、留美はどう反応したらいいのか解らなかった。
「ほら、行くぞ」
そう言うと浩平は、クッキーの袋を持ったまま歩き出した。
留美は慌てて廊下の方に出た浩平の後を追った。

歩きながら、浩平はラッピング袋に手を突っ込んで、ごそごそとクッキーを取り出していた。それを口に運んで食べる。
「意外にうまいじゃないか、このクッキー」
「そう、よか……落ちたの食べてるの⁉」
留美はぎょっとしてラッピング袋をひったくった。
「やめときなさいって。今度、焼いてきてあげるから」
クッキーはお世辞抜きで本当においしかったらしい。
浩平はにっと笑った。
「それは嬉しいな」
「うん、約束してあげるわよ」
留美は何となく面映ゆい気分で、浩平の顔を見上げた。
「じゃあ、二人でカラオケってのもないし。商店街の方でもぶらつこうか」
「そうね」
いつも馬鹿なことばかり言っている浩平が、何となく眩しく見える。
むずがゆいような、嬉しいような不思議な気分のまま、留美は浩平と並んで歩き出した。

第5章 メロディライン

(折原が……あたしを助けてくれたんだ)
隣を歩いている浩平の横顔から眼が離せないまま、留美は考え込んでいた。
留美が夢見ていたような非の打ち所のない王子様とは、浩平はあまりに違い過ぎていた。子供っぽくて、頭痛がするようないたずらを繰り返す、『好ましい恋人像』から明らかにかけ離れているのだ。
それでも、留美は浩平から眼が離せなかった。
あの場から助けてくれた浩平が、いつもよりも凛々しく見える。
「……七瀬、どうかしたか？」
気が付くと、浩平がいぶかしそうに留美のことを見ている。
「えっ？」
「俺の顔のパーツ、どこか足りないか？」
「ううん、全部揃ってるけど」
どうやら浩平が話しかけていたのに気が付かなかったらしい。
留美は慌てて笑みを作った。
「で、何の話だっけ？」
「音楽だよ。七瀬の聴く音楽はどんなやつだ？　おまえの性格からすると、やっぱりスラッ

シュとかデス系か？」
よく考えてみれば、二人で入ったのはＣＤショップだったのだ。当然そんな話も出るだろう。しかし、浩平の言っているジャンルは留美には馴染みのないものだった。
「ええと……」
口笛もっていると、浩平が棚から一枚ＣＤを出してくる。
「ほら、これが七瀬にはお勧めだ。買え」
よく見ると、その棚にはとんでもないデザインのＣＤばかり置いてあった。
髑髏（どくろ）や死体、写っている人間も凄まじい表情のものばかりだ。色合いも、殺人的にどぎついものがほとんどだった。ファッション誌もかくや、という趣味のいいものも多いが、どうにも留美が好きそうになれないデザインばかりだ。
浩平はディスプレイされている中でも、一際強烈なジャケットのＣＤを差し出していた。
「何これ……やけに禍々しい物体ばっかりレイアウトされてるけど」
「知らないのか。デスメタルの大御所だ。七瀬なら絶対気に入ると思うぞ」
「デスメタル？」
今まで知らないジャンルだったので、イメージできなかった。
不安そうに首を傾げた留美に、浩平は力強くうなずいた。

「何だ、知らないのか？　じゃあ、尚更お勧めだ。おまえにぴったりの音楽だぞ」
「よく解んないけど、折原がそう言うなら買ってみる。ちょっと待っててね」
学校で浩平に助けてもらったことで、何となく浩平のアドバイスを聞いてもいいような気がしていた。
留美は浩平からＣＤを受け取ると、レジに向かった。
会計を済ませて戻ってくると、浩平が手持ち無沙汰な様子で待っていた。
「折原、本当にこれ、あたしの趣味に合うと思う？」
「ああ、絶対だ。これを知らないで人生を過ごしてきたことを後悔するはずだぞ」
「そんなにいいんだ」
そこまで言われるのなら、ジャケットで先入観を抱いてはいけないだろう。
多少不安はあるものの、留美は嬉しそうに店の袋を鞄にしまった。

その後二人でファストフードショップに入ってハンバーガーを食べながら、他愛ないことを話して、途中まで一緒に帰った。
なかなかいい雰囲気だったと言えるだろう。
（このＣＤを除けば、ね）

家に帰って、袋から買ったばかりのCDを出す。
(うーん、これ……本当にあたし好みなのかな)
よく見るとアーティスト名も死体がどうのといった縁起の悪そうな名前で、どう考えてもどきどきするようなラブソングや気持ちのいい曲を作っていそうには思えなかった。
(でも、せっかく折原が勧めてくれたんだから)
どことなく不安そうな面持ちでCDラジカセにそのCDをセットする。
七瀬留美は、この時点で大きな間違いを犯していた。
折原浩平がどう考えても王子様らしいタイプの気遣いをする相手ではないことを、すっかり忘れ果てていたのだった。

曲が流れ出して数秒たつと、留美はおもむろに音楽を止めた。
「う……っ！」
強張った顔をCDケースに向け、歌詞カードをチェックする。
元の歌詞と、その翻訳が並べて書かれているのを、留美は舐めるように眼で追った。
殺戮、流血、悪魔、死体、腐敗。
ホラー映画にでも好んで取り上げられそうな単語が目白押しだった。

しかも重低音や何か吐いているような特徴のありすぎる歌い方のせいで、思わずふらふらとしてきてしまった。
（折原って……こんなの聴くの？）
会話の感じだと音楽関係には結構趣味が広そうだった。もしかしたらこういう音楽も浩平の好みなのかもしれない。
留美の好みだと言いつつも、浩平がきめ細かく相手の好みに添って音楽を勧めてくれるタイプではなく、自分の好きな音楽を勧めていただけなのかもしれなかった。
浩平の性格を考えれば、その方が有り得そうだ。
明日、浩平に問い質してみよう。
そう思いながら留美はＣＤをケースにしまってＣＤラックの中にしまった。

翌朝、浩平と約束していたクッキーを焼くために早起きして、ほんわりと甘い匂いを放つ、焼き立てのクッキーを袋に入れると、いつもよりも早く留美は家を出た。
朝の冷たい空気を吸い込んで、留美はゆっくりと道を歩く。
この調子だと、かなり早い時間に学校に着くだろう。
時々浩平と出逢うＴ字路のところで、留美は立ち止まった。

（折原、来るかな）

五分ほど手持ち無沙汰に立っていたが、いつもよりも人気の少ない道には、ほとんど歩いている者もいない。

騒々しく走ってくる浩平の足音が聴こえる様子はなかった。

留美は溜息をつくと、そのまま学校の方へ向かった。

自分の席まで来て、留美は最近お馴染みになっていたものが見えないのに気が付いた。画鋲がなかった。さすがに浩平の怒声は効果があったらしい。もちろんあの不愉快な落書きもなかった。

あの後、取り残された真希はどうなったのだろう。困ったのか、それとも何事もなかったように帰ってしまったのか。さすがに気になった。

廊下側にある真希の席を見ると、相変わらず取り巻き達と一緒に喋っている。

留美が見ていることに、真希だけが気付いて視線を返してくる。

何か言われるのだろうかと思ったが、真希はすっ、と視線を戻し、何となくつまらなそうな顔で再び取り巻き達との話に興じ始めた。

留美は何となく気が抜けてしまい、席について鞄の中身を取り出した。

結局浩平の顔を見ることができたのは、始業の五分前だった。
「うーす、七瀬。何もなかったか？」
「うん、なかった。まあ、他に何があるかは解んないけどね」
「まあ、しばらく注意しておけ」
「うん、解った……あ、そうだ」
留美は机にしまったクッキーの袋を取り出した。
「はいこれ。約束してたでしょ」
袋を受け取った浩平が眼を丸くしていた。
「これ、もしかして昨日落としたやつじゃないのか？」
「馬鹿っ。今朝焼いてきた焼きたてよっ」
そもそも昨日のクッキーは浩平が１／３ほど食べた後、留美が捨ててしまったのだ。こんなところに残っている訳がなかった。
「そりゃ凄いな。世の中のパパやママは見習わなきゃな。サンキュ」
浩平は嬉しそうにクッキーの袋を机にしまった。
(早く、ちゃんと味見してほしいな)
留美はそっと浩平の方に視線を向けた。

テストが返ってくる途中、聴き憶えのある音が後ろから響いた。
かさり
（ちょっ、ちょっとまさか……）
どうやら浩平がクッキーを袋から出そうとしているらしい。
しかし、何かを取り出そうとしてもぞもぞしている浩平に、教科担任が気が付いて顔を向ける。
そして早足で浩平に近付くと、後ろから肩を叩く。
「折原、没収だ」
「ああっ」
今にも口に入れる寸前だったらしい。クッキーを一枚むんずと取り上げられ、袋ごと持って行かれてしまう。
せっかく焼いたクッキーは、間違いなく職員室のお茶請けになってしまうだろう。
（朝から渡すなんて、あたしが馬鹿だった）
留美は大きな溜息をついたのだった。

休み時間になり、浩平はぱんっ、と掌を合わせてみせた。
「悪いっ、七瀬！」
「何の為に早起きして焼いてきたんだろう」
「俺だって悲しいぞ。ひとつも食ってなかったんだから」
観点が全く違っているが、留美はそんなことに気付いている余裕はなかった。
「朝なんかに渡したら授業中に食べるってこと、考えたら解ったことだったのに」
大きな溜息をつく留美を見やって、浩平が肩をすくめる。
「長森みたいなことを言い出すな、お前」
「そりゃ折原といればそうなってくわよ。こんな目に遭ってばっかりじゃ、瑞佳もほんとにかわいそう」
「ところで、クッキーどうしよう」
さんざん嫌味を言われているのに、浩平はやっぱりクッキーが気になるらしい。
これで何度目だろうと思いながらも、留美はまた溜息をついた。
「もういい。また焼いてきてあげるから」
「今度は没収されそうになったら、一気に口の中に放り込むからな」
「……没収されそうな状況で食べないでくれる？」

「そうだな。気をつけるよ」
浩平は悪気のなさそうな顔でうなずいてみせた。
（やっぱり……折原は折原よね）
折原浩平というのは、こういう人物なのだ。
留美の把握はまだまだ甘かったらしい。

全ての時間がテストの返却で、昼までの授業は終わった。
今日は半日だ。瑞佳を始め、また部活が始まった生徒は、慌しく教室を出て行ってしまう。いつも通りの空気が戻ってきていた。
しかし部活に行かない浩平は、相変わらず暇そうに鞄を片付けている。
「折原、帰る？」
「ああ、長森の部活がまた始まったからなあ。あいつを引っ張り回すのは無理そうだし」
どうやら空腹らしく、しきりに腹のあたりに掌をやっている。
やはり、朝にクッキーを食べ損ねたのが一番の敗因らしい。
「瑞佳とだったら、どっか寄って帰るの？」
可愛らしくて人の好い瑞佳は、きっと浩平に振り回されているのだろうと思いつつも、

何となく一番に名前を出してもらえることがうらやましかった。
「あいつとはよく新しい食い物屋を求めて歩き回ったりするよ。ああ見えて長森は結構軽快なフットワークで俺についてくるからな」
「あたしでよかったらつきあうけど……駄目、かな」
フットワークについては充分自信があった。
体の故障の後とは言え、運動部に入っていない瑞佳と日常の基礎体力で引けを取るほどではない。
「よし、行こう！　七瀬だったら断わる理由はないからな」
「そ、そう？」
深い意味はないのだろうが、そう言われるとやはり嬉しい。
「久しぶりにうまいもん食うぞ。前人未到の店を見つけようぜ」
「うん」
浩平が瑞佳と共有していない場所を探すというのは、転校してきて間もない留美にとって、かなり分が悪い勝負だ。
それでも、二人で一緒に思い出を、場所を共有しようということ自体が嬉しくて、何となく笑みがこぼれ出ていた。

その気持ちは、十五分後には大きく揺れることになった。

「……ここ？」
留美は呆然と眼の前にある建造物を見上げた。
浩平が勢い込んで、ここにしよう、と指差したのは、どう考えても廃屋だった。
ここが『食べ物屋』であったのは、下手すると留美が生まれる前なのではないだろうかと思われる錆びた看板には、確かに『めしや』と書かれている。
しかし、古びたその建物が現役の食堂であるとはとても思えなかった。
「瑞佳とも、こんな店に入ったりしてるの？」
「いや、さすがに前に長森と来た時には断わられた」
「でしょっ!?　だったらもっと普通のお店にしようよっ」
ちらりと後ろを振り返るだけでも、いくつか食事のできそうなところはあるのだ。
何故まっとうな外装の店を全て通り過ぎ、ほとんどお化け屋敷で通りそうな店に、嬉々として入らなければならないのだろう。
どう考えても二人きりで出かける店ではない。
「七瀬だったら一緒に入ってくれると思ってここに来たのに」

浩平は少し不満そうに留美のことを見やった。
心拍数の上がりそうな、どきどきする言葉とはうらはらに、留美の気持ちはさすがに重かった。
「そんなこと言われても、これはさすがに……」
まともに入れる店じゃない、と続けようとした留美の言葉にかぶせるように、浩平がまくし立てた。
「その抵抗感に意味があるんだよ。こういう店がうまかったら大発見だろう？」
確かにその通りだ。
勇気を出して入った店が、実は知る人ぞ知る名店である可能性もなくはない。
そういう店を発掘してきたのだとしたら、いい思い出になるのは間違いない。
留美のためらいを、浩平は賛成と取ったらしい。
「じゃ行くぞ」
いきなり留美の手を摑んで扉を開けたのだった。
外見から予想されるように、そこは食べ物屋ではなかった。
何もない土間には、いくつもテーブルが並べられていたのだろうという形跡だけは残っ

ている。
「やっぱりここ、お店じゃないんじゃ」
留美が不安げに呟いていると、奥から七十前後といった外見のおばあさんが出てきた。くっきりと皺の刻まれた顔は人の好さそうな感じだ。
「あれあれ、どなたかい？」
「いえその……ねえ、折原、帰ろ」
浩平の袖をちょんちょん、と引っ張ったが、浩平はそれを気にせず口を開いた。
「すいません。メニューください」
「わっ」
狼狽した留美をよそに、浩平とおばあさんが話を続ける。
「あれまあ、ごめんなさいよ。もう店は二十年も前に畳んじまったんだよ。ひょっとして、うちに食べに来てくれたのかい」
「そうです。何かありますか？」
「だからないって……」
留美が申し訳なさそうにうつむいていると、おばあさんは眼を丸くしながらもうなずく。
「まあ、看板を出しっぱなしにしていたうちが悪いんだからねえ。せっかく若い人がお腹

を空かせて来てくれたんだから、久しぶりに何か作ろうかね」
「あっ、そんな！　悪いですっ」
「いいよいいよ。アタシもね、お客が来てくれて気が晴れるよ。ほら、そこから上がってこたつにでも入っててくれるかね」
おばあさんは珍しい客人に笑いかけると、いそいそと奥へ引っ込んだ。
「折原、変なことになっちゃったわね」
「まあ、これで何か食えるんだからいいとしよう。じゃあ、上がるか」
浩平は動転した様子もなく靴を脱ぎ、すたすたと中に入っていってしまう。
留美も戸惑ったように浩平の後をついていった。

見知らぬ他人の家に上がり込んで、あまつさえ食事を作ってもらう為にこたつで待っている。デートコースとしては、かなり異様だろう。
どうやらささやかな一人暮しをしているらしいおばあさんの家の中を、何となく見回してみた。
奥の方に亡夫であるらしい老人の遺影が飾られた仏壇がある。
壁に留美が知らない酒屋のカレンダーがかけてあったり、手すさびで作ったらしい編み

ぐるみが古いテレビの上に置いてあったりする。
一軒家に住んだことはないせいか、こういう古びた家というのは郷愁を感じるというよりも、不思議なイメージがあった。
浩平はこたつに入るとすっかりリラックスしたのか、勝手に篭に入ったみかんをむきながら留美に話しかけてきた。
「このみかん、食ってもいいのかな」
「あんたね、むいてから言わないの。それにしても折原、こういうのに馴れてるの？」
「こういうのって？」
「知らない人の家で、いきなりご馳走になってくることとか」
「いや、これが初めてだ」
「その割には落ち着いてるわね」
浩平はみかんを口に放り込んだ。
「こういうのもいいんじゃないか？　とりあえず『食い物屋探索』は成功した訳だし、それに、面白いだろ？　めったにできない体験だぞ」
「まあ、そうね」
浩平と二人で、そういう時間を過ごしてゆくこと。

それがどんなに型破りでも、何となく楽しいような気がした。
おばあさんが付けっぱなしにしていたテレビを見ながらぼうっとしていると、向こうから足音がした。
「こんなもんしかないけど、よかったらお食べよ」
大きな鉢に甘辛い匂いのする芋の煮っ転がしを盛りつけて、おばあさんが戻ってきた。まだ作り立てで湯気が立っていた。
「お箸なんかは今持ってくるからね」
「あ、あたし手伝います」
留美はこたつから抜け出ると、慌てておばあさんの後を追った。

「それじゃ娘さん、これ持って行ってくれるかい」
おばあさんは小さめのお櫃にごはんをよそって留美に渡した。
家では使わない経木のお櫃も何となく珍しくて、不思議な気分だ。
「もうおつゆができるからね」
「本当にすみません。何だか非常識なことしちゃって」
「いいんだよ。昔は近所の子供が用もないのに入り浸ってたものさ。こういうのは楽しい

からね」
「そう、ですよね」
世にも型破りな会食ではあるが、こういうのも悪くはない。
「じゃあ、お櫃、持って行きますね」
留美はお櫃と、テーブルに出してある箸を持って居間の方へ戻ってきた。
「おっ、それはお前のメシか？」
「全員分に決まってるでしょ。はい、お箸」
「うまそうだな」
「ん。お櫃があったかい」
留美がこたつに入ると、おばあさんが汁碗を乗せたお盆を持ってくる。
「さあ、食べようかね」
三人は何となく礼儀正しく合掌して奇妙な食事を始めた。

「またおいでよ」
おばあさんに見送られ、留美と浩平はかつて店だったその建物から出てきた。
外はもうすっかり寒くなっている。

商店街の灯りがいくつもともっている中に、大きなクリスマスツリーが浮かび上がっていた。街に流れるメロディもクリスマスソング一色だ。
あさってのクリスマスイブまで、豪奢な飾り付けがそこかしこに置かれて、まるできらきらのおもちゃ箱のようだった。
「なあ、七瀬はどうするんだ？ クリスマスは例年通り、ストリートファイトに明け暮れるのか？」
「んな訳ないでしょ」
横を歩く浩平の顔に、照明のせいで濃い陰影ができる。
「折原はどうなの？ 暇なんだ、イブの夜」
「このまんまだとな。お前の方は野郎連中が放っておかないと思ったけどな」
「まあ、いろいろ話はあったけど……」
実際のところ、ここ数日はしばらく収まっていた男子生徒の猛攻が休み時間になるたびに復活して、半ば閉口していたところだ。
しょっちゅう浩平といることで、何人かの生徒にはつきあっているのではないかと思われている節がないでもないが、ほとんどはそんなことはお構いなしだ。
「全部断わったのか？」

「だって、あんまり知らないような男の子たちよ？　怖いじゃない」
「そりゃあな。男なんかと過ごすものじゃないだろうな。親が泣くぞ。野郎なんぞと過ごすよりは、長森達のクリスマスパーティに行ったらどうだ？　呼ばれなかったか？」
「え？　何も聞いてないけど」
嘘だった。
今日の休み時間に瑞佳は留美に声をかけにきてくれたのだ。
瑞佳と仲のいい女生徒が集まって、持ち寄りパーティをするらしかった。
『ごめんね。ちょっと用があるかも……』
ちらっと浩平の方を見た視線を、瑞佳は見逃さないで笑いかけてくれた。
『残念。みんな七瀬さんと話したがっていたのに。でもその用が早く片付いたりしたら、おいでよ』
そう言うと、居眠りしていた浩平の髪の毛をぎゅっと引っ張って行ったのだった。
浩平と過ごしたかった。
しかし、浩平の方は留美の気持ちにお構いなく、とんでもないことばかり言っている。
「多分、そのうち声がかかるよ」
「う……ん、だったらいいけど。あ、そうだ。今日は大変だったけど、楽しかったね」

これ以上、瑞佳のパーティの件について追及されないように、留美は話をそらした。
「ああ。店じゃなかったけど、おいしかったな」
「もう、お腹がぱんぱんになっちゃった。まだふらふらする」
「なにも無理して食うことなかったのに」
「だってあのおばあさん、どんどん勧めてくれるんだもの。食べると嬉しそうにしてくれるし、断わりづらくって」
浩平が思い出し笑いを浮かべる。
「そうだな。七瀬のこと気に入ってたしな。おまえもあんなにほめられたの、初めてなんじゃないのか？」
ちょうど同じ年頃の孫が遠くに住んでいるらしく、その年齢の女の子と話すのが嬉しかったらしい。数年分くらいまとめてほめられたような気がする。
「悪い気はしなかったけどね」
「まあ、老眼なんで歪んで見えたんだろうけど」
「どういう意味よっ」
ぶん殴ってやろうかという発作を抑えている留美に気付く様子もなく、浩平は何事もなさそうに他の話題に移った。

留美の怒声には慣れっこになっているらしい。
「そういや、七瀬。この間のＣＤ聴いたか？」
「えっと、あ……うん」
一曲の途中までとは言え、聴いたと言えなくもない。
次に聴いたら頭痛の発作が出そうだった。
「よかっただろ？　おまえの好みを見切ったチョイスだったからな、あれは」
「いや、ちょっとあれは……」
「他にもあんな感じの、たくさん教えてやるぞ。またＣＤ見に寄ろうか」
「う、うん……」
翳のない浩平の笑みに、力なく笑い返す。
「しかし、あれが聴けるとは七瀬も凄いよな。俺だって、こんな雑音のようなぶち切れた音楽は耳障りで聴いてられないからな。さすが七瀬だ」
ぴきん、と頭の中で音がなったような気がした。
「まさか折原、あれ、好きじゃないの？」
「ああ、全然駄目だな」
倒れなかっただけでもかなり自分をほめてやりたいほどだった。

腹筋に力を入れ、わめき出しそうになるのを堪える。
「あたしも、もっと聴きやすいのがいい。我慢しても一曲聴き通せなかったし」
「何だ、無理してたのか？　なのにまたデスメタル見に行くつもりだったのか。訳解らない奴だな」
気になる相手の好きな音楽を聴いてみたい、という乙女心を説明するだけでも空しすぎる。留美は話をそらした。
「折原、普段何聞いてるの？　それ勧めてよ」
「俺か？　俺はもっとソフトなやつだな。そっちの棚見に行こうか」
「うん」
少し歩いたところにあるCDショップに入ると、今度は違う棚の方へ向かう。
「このへんなんか結構お勧めだぞ。これはだなあ、ギタリストが死ぬ直前に出たやつで、俺としては一番いい出来だと思ってる」
今度浩平が出してくれたのは、もっと淡い色合いのジャケットがついたCDだった。
「へえ、今度はよさそうな感じじゃね」
「ラストの曲がさ、結構耳に残るんだよ。なかなかいい……」
浩平の言葉がそこで止まった。

「折原……？」
何かが、違っていた。
視界は変化していないはずなのに、浩平の姿が薄らいでいるような気がした。
浩平の眼が、留美を映したまま焦点を結ばない。
わあん、わあん……
耳の中で流れている音楽が、ひどく薄っぺらく反響する。
「折原、ちょっと!?」
留美はぎょっとして浩平の肩に掌を置いて揺すった。
びくん、と浩平の肩が震え、眼が留美の姿を認める。
「……七瀬、どうかしたのか？」
「え、ええと、ＣＤ、買ってくる」
「ああ、行ってこいよ」
留美は何となく不安なまま、ぱたぱたとレジに向かった。
「帰ったらＣＤ、聴くね」
「ああ、絶対いいぞ」
あの時の違和感が嘘のように、浩平が笑ってくれる。

留美は少し気後れしながら一緒に歩き始めた。

その夜。
「あ、これ……」
今度のCDはデスメタルのCDとは違って、かなり留美の好みだった。染み入るようなメロディラインが悲しくて、思わず何度も聴き直してしまう。
浩平のお勧めだったラストの曲など、本当に泣きそうになったほどだ。
(明日、もう一度クッキーを作ってあげようかな)
新しいクッキーを渡してあげたら喜ぶだろう。
その時に、クリスマスに一緒に過ごそうと誘ってくれるかもしれない。
CDが止まった。
「折原……」
留美はほんのり頬を染めてうつむくと、もう一度CDをかけた。

第6章　王子様と踊ろう

クリスマスイブ。
早起きしてクッキーを焼いた留美は、照れくさそうに鞄にしまった。
(折原、誘ってくれるかな……)
そんなことを考えながら、早めに学校に向かう。
いつも浩平と出逢うT字路でしばらく待っていたが、今日は遅い日らしく、いつまでたっても姿を現さない。
浩平と同じ制服の少年が視界に入るたび、さっと顔を向けるが、全員別人だった。
このままでは、遅刻ぎりぎりまで待っていなければならない。
(今日はぎりぎり、かな)
溜息をつくと、留美は学校へ向かった。

予想通り、浩平が教室に滑り込んできたのは始業ぎりぎりだった。
「おはよう、折原」
「うぃっす。昨日のCD、聴いたか?」
「あ、うん、聴いた。すごくよかった」
留美がそう言うと、浩平も嬉しそうに笑った。

「そうか、勧めた甲斐があったな」
「でもああいう音楽ってどうやって知るの？」
「ああ、音楽好きの友達からだとか、ラジオだとかだな」
「ふぅん、あたしには音楽好きの友達もいないし、ラジオも聴かないから、あんなにいい音楽があるってことさえ知らずに暮らしてるんだよね」
「そりゃもったいないな」
こうやって知らない世界を見せてもらえる機会があると、余計にそう思う。
今まで、剣道以外の全ては留美の視界に入っていなかったせいで、気持ちいい音楽、楽しいことの大部分を知らずに過ごしていた。
それを変えてくれたのは、浩平だ。
一番王子様らしくない少年がお世辞にもスマートとは言えない方法で、結果的に留美のことを助けてくれている。
(折原が、あたしの王子様……なのかな)
留美はうつむくと、口を開いた。
「あ、あのさ……今日」
「七瀬、今日は暇か？」

まるで心を読んだようなタイミンクで、浩平がそう切り出してくる。
「あ、ううん、大丈夫」
留美が首を振ると、浩平はにっと笑った。
「そうか。ならいいところに連れてってやるから、終わったら待ってろよ」
「うんっ」
留美は驚きと嬉しさで、眼が回りそうだった。
いつもは型破りな浩平も、特別な日にはそれらしいことを考えてくれるのだ。そのこと自体も半分意外で、それ以上にどきどきしてしまう。
周りは、終業式の為に生徒が移動し始めていた。
「えっと、何時に待ち合わせ?」
「夕方までは住井たちとの約束があるし……そうだな。7時くらいに校門前な」
「じゃあ、一度帰ってるね。着替えてきたいし」
「そのままでいいじゃん。俺だってそうだし」
それではあまりにいつも通りすぎて、特別な日のデートみたいには思えなかった。
ほとんど袖を通していない、お気に入りのワンピースのことを思い出す。
クリスマスのデートには、やはりそれを着たかった。

「やっぱりおかしいって。着替えようよ」
「いいって。こんな格好の方が似合う場所だからな」
確かに、まだまだゴージャスなデートをする年齢でもない。
浩平が等身大で用意できるデートは、カジュアルな格好の方が似合うロケーションなのだろう。
小劇団の芝居などなら、確かにドレスを着てゆくと浮いてしまうかもしれない。
もちろんデートコースのロマンティックさは、ゴージャスかどうかで決まる訳ではない。
留美は浩平が自分の為に用意してくれる驚きを予想して、何となく幸せになった。
「そろそろ体育館行かないとな」
「うんっ」
留美は席を立って浩平と歩き始めた。

退屈な校長の訓辞、渡された膨大な量のプリントなどに閉口しつつも、生徒達はみんな明日からの休みに浮かれているようだった。
留美もまた、夕方七時に待っている浩平との約束が楽しみで仕方がなかった。
「折原、また後でね」

「ああ、楽しみにしてろよ」
住井達と一緒に教室を出て行こうとする浩平に手を振ると、笑いながら手を振り返してくれる。
「おいっ、クリスマスは七瀬さんと一緒なのか!?」
「罰ゲーム食らわせてやろう」
周囲の男子にからかわれながら、浩平は留美とは逆方向に歩いてゆく。
留美は少し照れながら浩平の後ろ姿を見送ると、反対側に向かった。

約束の時間まで、しばらく間があった。
家まで戻ると留美は一度鞄の中身を整理して、制服を脱いでハンガーにかける。身支度をするのに、制服を着たままなのは性に合わない。
キッチンで軽い昼食をとってから、もう一度自室に戻ってくる。
一応服にブラシもかけておきたい。
適当に服を着て、一度髪をほどく。
さっきかけた制服の隣には、今日着る為に出してあったワンピースがかかっている。
(これは、着て行けないのね)

それならせめて、ワンピースと色を合わせて買ったリボンをしてゆこう。
留美は髪をとかし始めた。

「さ、寒い……っ」
午後7時12分。
暗くなった校門の前で、留美は優に30分は立っていた。
約束の時間より20分も早く来たのがまずかったのだが、そろそろ体が冷えてかじかんできていた。
「はうう、折原。こんな日に女の子を待たせるなんて」
どう考えても浩平は、時間厳守とは似つかわしくないタイプではあるが、こういった時には恨めしくてならない。
留美は自分の白い息を見て、何となくわびしくなった。
結果として、浩平が校門前に現れたのは7時半を回ったあたりだった。
「遅いいっ」
「悪い悪い。抜け出してくるのに苦労したんだ」
「こんな寒い中、女の子ひとり待たせておいてぇ。まあ、30分ってのは折原にしてみれば、

ましな方なのかもしれないけど」
「だから謝ってるだろ？」
留美がふくれてみせると、浩平は掌を合わせてみせる。
「でも、やっぱ30分は遅すぎ。帰ってもよかったかな」
自分が50分近く待ったことは、浩平には内緒にしておくつもりだった。
「帰っていたら、おまえの家に電話かけてたよ。七瀬と行きたいからな」
その言葉に、ついつい相好を崩してしまう。
「ほんと？　だったら、結局一緒かぁ」
「じゃ、いくか。あんまし遅くなると混むからな、あそこは」
どうやら人気スポットらしい。
「うんっ」
留美と浩平は、並んで歩き始めた。
商店街のイルミネーションは、夜に見ると一際明るく見える。
それが昨日までの光より輝いているように感じるのは、特別な相手と一緒に過ごす時間だという気負いがあるからだろうか。
大きなクリスマスツリーに、数え切れないほどの灯りや飾りが飾られ、その周囲に幸せ

そうな人達がひしめいている。
互いしか眼に入っていないようなカップル達を見て、留美の期待は一層高まった。
「お、急がないと座れなくなりそうだな」
「ねえ折原。今日連れてってくれるのって、映画？　それともプラネタリウムとか、何かのお芝居？」
「おまえが泣いて感動しそうなものだ。今日は寒いしな、余計に感動ものだな」
「ほんとっ？　すごい楽しみっ」
今日は寒いし、という言葉が意味不明だったが、留美は眼を輝かせた。
二人は足を速めた。
そして浩平が止まった場所には、確かに人だかりができていた。
「おっ、やっぱり流行ってるなあ」
人だかりに流されてゆきそうな留美の手を浩平が引き寄せ、その店に入った。

そこからは強烈な、にんにくの匂いがした。

「キムチラーメン、大盛りふたつっ！」

手早く二人分の席を確保すると、浩平は注文を出した。
「……え」
小吉ラーメン
外にあった看板にそう出ていたのを、留美は思い出した。
気が付くと呆然と座っている留美の前に、どんぶりが置かれている。
「ここのキムチラーメンは、めちゃくちゃうまいんだよ。やっぱり、寒い日はここのキムチラーメンが一押しだな」
確かににんにくのばっちり効いた、おいしそうな匂いのキムチラーメンを食べれば、体は温まりそうだった。
浩平の言葉も耳を抜けてゆくばかりの留美は、機械的にラーメンをすすった。
おいしかった。
おいしくて、温かかった。
それでも、食べ進めてゆけばゆくほど、留美は悲しくなってきた。
「ほら、もっとキムチ入れてやるぞ」
浩平が取り放題のキムチを留美のどんぶりに入れてくれる。
ぼちゃぼちゃ、という音と、キムチの赤い色が、留美の期待していたロマンティックな

クリスマスを、これでもかこれでもかと打ち崩していった。
情けなさの余り、頬を涙がつたって落ちる。
「調子でも悪いのか？　よし、今日はつきあってくれたお礼におごってやるからな。おかわりしたっていいんだぞ？　これを食って元気を出そうぜ」
浩平にとって、特別な日だということの意味はないのだ。
そう思った瞬間、留美はおもむろに財布を取り出し、小銭を台に叩き付けた。
「嬉しくないっ！　こんなものおごってもらったって!!」
「お、おい……っ」
留美は店から駆け出していた。
涙で滲んだイルミネーションが、他の人が過ごしているクリスマスのきらめきを現しているように、さっきより輝いているのが余計に悲しい。
（あたし……キムチラーメン食べる為に誘いを断わったの？）
瑞佳がいろいろ留美について話してくれたせいか、瑞佳と仲のよい生徒を中心として留美に好意を持ってくれるようになってきたばかりだ。
女の子ばかりの持ち寄りパーティも、キムチラーメンを食べる為に寒空の下で待っているよりずっと楽しかったはずだ。

留美はふと立ち止まって、小吉ラーメンの方を振り返る。
決してまずかった訳ではない。それどころか、かなりおいしかった。しかし、どう考えてもクリスマスとは無縁の賑わいで、ロマンのかけらもなかった。
入り口から、浩平の姿が見える。
留美は反射的に商店街からはずれの方へ走っていた。

そこは、高台の公園だった。
ほとんど満月に近い、丸くて大きな月が空に浮かんでいる。
留美は何となく月を見上げながら、公園の中央にある噴水の側にたたずんでいた。
商店街と違って、周囲はしんと静まっている。
(最悪のクリスマスだわ)
留美は溜息をついた。
なまじ期待をしてしまった分だけ、特別な存在になりかけていた浩平にとって、クリスマスに自分と過ごすことさえ、所詮いつも通りの日常でしかなかったことが辛い。
(帰ろうかな)
そう思った時、遠くからばたばたと駆ける足音が近付いてきた。

「おい、七瀬っ。どうしたんだ！」
がしっと肩を掴まれる。
真剣な顔を向ける浩平を見ると、今まで堪えていた涙が溢れ出てくる。
「今日は、クリスマスなのよ……っ？」
「あ、そう言えばそうだっけ」
留美が何について文句を言っているのか解らない、とでも言いだけに、浩平が見下ろしている。
「折原にとってはそれだけのことかもしれないけど、あたしにとってはすごく大切な夜だったんだからっ。クリスマスよ、クリスマスっ！　期待してたのにっ……ものすごく期待、して、たのに……！」
言葉の後半は、悔し涙でかき消されてしまう。
「七瀬、俺は」
「誘われた時、嬉しかったのに。何だかんだ言っても、あたしのこと気にかけてくれてるって……嬉しくて、他の誘い断ってまできたのに……だ、大好きな男の子とっ、ふたりきりで過ごせるって」
浩平の眼が見開かれる。

「折原には、そういうの全部どうでもよかったって解ったら、あ、あたし……」
もうそれ以上言葉は出なかった。
ぼろぼろこぼれる涙に、浩平の視線が向けられているのが解る。
泣きじゃくる留美に浩平は長い沈黙の後、ぽつりと言った。
「七瀬、どっか行くか」
「遅いわよっ。こんな時間じゃあ」
そもそも特別でない相手を泣き止ませる為に、わざわざ誘ってほしくなどなかった。
浩平の声が低く、やわらかなものになる。
「どんなところに行きたかったんだ？」
留美はしばらく考えてから、口を開いた。
「ダ……ダンスパーティとか」
お姫様が王子様と出逢うのは、いつも舞踏会だ。
運命の赤い糸が見えているかのように、王子様はお姫様に手を差し伸べる。
そんな、幸せな夢。
乙女になれば、必ず巡ってくると思っていた未来。
「……よし、踊ろう。七瀬」

「えっ？」

思わずきょとんとした顔で見上げてしまった留美に、浩平は真面目な顔を向ける。

「ほら、手出して」

そう言うと、留美の返答を待たずにおもむろに手を掴んだ。

「で、どうすんだ？」

ぶっきらぼうな声で、それでも留美と踊る為に手を取っている。

「こ、こうかな」

体育の授業で習ったことのあるソシアルダンスのステップのひとつを、おぼろげながら思い出し、浩平の背中におずおずと空いている方の腕を回す。

「馬鹿っ、そっちじゃないっ。こっち！」

元々、男性にリードしてもらう形のダンスで、踊ったことのない男性パートナーをリードするだけの技術は当然なかった。

足を踏まれてバランスを崩し、浩平に頭がぶつかってしまう。

「さすが七瀬、いい頭突きだ」

「わざとじゃないわよ。そっちのステップが間違ってるのよっ！」

「ん、こうか？」

ぎこちなさすぎる、童話の中のダンスとは似ても似つかないほど不恰好なダンス。
それでも、ずっと寄り添ってステップを踏んでいると少しずつ、少しずつ、動きが自然になってゆく。
「七瀬」
「うん……折原」
浩平の唇が、そっと留美の唇に触れた。
（折原はあたしの、王子様になってくれるんだ……）
恋をするのに世界で一番馴れていなさそうな浩平が、留美の王子様になってくれようとすること。
お城も、白馬もない。スマートなエスコートもない。
おまけに初めてのキスはキムチ味とくる。
それでも、留美の為に努力してくれること。それが嬉しくてたまらなかった。

「そう言えば、これ。約束してたでしょ」
月明かりの下、二人で夜道を歩いている時に、留美は鞄からラッピング袋を取り出した。
「サンキュ。走ったから腹が減ってたんだ」

食べ盛りの浩平は、ラーメンだけでは足りなかったらしい。
にこにこしながらラッピング袋を開けると、テディベアのクッキーに手を伸ばした。
ぽりん、ぽりんとクッキーをかじる音が響く。
「我慢を知らないのね。歩きながら食べ始めるなんて」
「今からメシを食いにどこか入る訳にもいかないからな。しかし美味いぞ、これ。七瀬も食ってみろよ」
「ん」
浩平が一枚クッキーを渡してくれる。
留美は何となくつられて、クッキーを口に運んだ。
「おいし……」
夜道で二人、ぽりぽりとクッキーを食べながら歩くというのも、かなり奇妙な光景には違いない。それでも浩平とそうしていられることで、特別な時間を過ごしていられることで胸がいっぱいだった。
いつもの分かれ道まで辿り付く。
「折原、またね。よいお年を」
「ああ、また来年な」

笑顔で手を振り合ってから、留美は浩平と別れた。
また来年も、こんな風に過ごせたらいい。そう思いながら。

年が明け、もう一度浩平と机を並べて過ごせる日々が戻ってきた。
「折原、あけましておめ……」
「少し太ったか、七瀬」
「そ、そんなことないって」
正月の間に体重は変化していないが、太ったと言われると頬の肉がやわらかいような気がしないでもなかった。
努力してくれるとは言え、デリカシーに欠けるところがあるのはそうそう直らない。
そう思っていたら、浩平の言葉は予想外の方に続いた。
「俺はどっちかって言うと、ふっくらした感じのほうが好きだけどな」
「あ、うん……少しだけ太ったかも」
体重増加はしていないが、浩平に好ましく見えているのならそれでもいい。
少しだけ染められた留美の頬に、浩平は掌を伸ばす。
脈拍の音がどくんっ、と耳に響く。もちろん頬に触れられる、などというロマンティッ

クなことなどが起こるはずもない。
楽しそうな浩平が、おもむろに留美の頬を引っ張った。
「いい肉付きだ。ついでにこっちも赤くしといてやろう。照れたみたいで可愛いと思うぞ」
ぐにーっ、と引っ張りながらとんでもないことを言っているせいで、頬の痛み以外の理由でも、両頬が熱くなってしまう。
いつも通りの子供っぽいいたずら。
それでも、あのイブを機会にふたりの関係は変わったような気がする。
ただのクラスメートから、側にいることのできる少し特別な相手として。
(あたし瑞佳より……折原にとっての乙女になれるのかな)
そうなれたらいい。
席についている瑞佳が留美の視線に気が付いて手を振ってくる。
留美も瑞佳に軽く手を振った。

少しずつ親しく、相手の存在を心地よく思えるようになってゆく。
放課後になると、二人で教室に残って何気ない話をして。好きな音楽の話、クラスのささやかな事件。

帰り道でおいしいものを食べて。
浩平の部屋でお勧めのCDを一緒に聴いて。
何となく互いがいないと物足りない。そういう気持ちを双方が自覚できた頃には、もう冷たい空気に微妙に花の匂いが混じり始めていた。
「そう言えばさ、折原」
「ん？」
窓を閉めていれば充分温かな教室で、ひなたぼっこする猫のような顔をしている浩平に、留美は話しかけた。
「あの時ね、折原はあたしのことを乙女にしてくれたんだよね」
「いつ？」
「ほら、あの馬鹿女の一件の時。あたし本当に、我慢の限界だったんだ。でも、怒鳴ってしまっていれば、またこの学校でもあたし、そんな性格で通ってしまってた……それを、寸前で折原が代わりに怒鳴ってくれた。あの時あたしは、折原に、乙女にしてもらったんだよね」
留美は微笑んで浩平を見上げた。
「最初は抵抗あったんだ。それまで折原、嫌な奴だと思ってたから。『ほんとにこんな奴が

あたしの王子様なの？』って」
「はっきり言うなあ」
苦笑する浩平に、留美は軽く首を振る。
「でもう、全部大好きになっちゃった」
空はもう、ほんのりサーモンピンクに染まっている。
外から、運動部の練習の声がするのに気が付いて、その声で昔の痛みを思い出して、留美は少し沈んだ表情を浮かべる。
「ずっと剣道してたんだ」
「へえ」
「剣道って、多分思ってる以上に生易しいものじゃなくてね、部室は年中臭いし、夏にはあんな重たいもの身につけて、汗びっしょりになって、冬には冷たい床の上を裸足で歩いて。たくましくないと、やっていけないところだった」
浩平は留美の言葉を遮らないように、わずかにうなずいた。
「あたし、練習もたくさんして、すごく頑張ってたの。だから大会とかでも勝つようになって、実績も残していった……でも、二年生になったって時にね、腰を悪くして、もう剣道続けられなくなった」

剣道どころか、激しい運動は全て駄目になる可能性さえあったのだ。
故障した当時の痛みや絶望、軽やかに動けたベストの自分を思い出して泣いたことを思い出すと、今でも胸は疼く。
「突然頑張ってきたもの、頑張れたものを失って、呆然とした。何をすればいいのか、解らなくなった」
「そんな時に剣道部の部長に推薦されたの、三年生の当時の部長から。でも、女子の部長なんて異例だったし、それに……竹刀も振れないような体の人間に、みんながついてきてくれるとも思わなかった。でも、その人にはお世話になっていたから、期待に応えようと思って部長になったの」
苛酷な練習に耐えて頑張っていればいるほど、リタイアしてしまった人間の言葉など聞くはずもない。言ったのと同じことをやってみせろ、と言われてもできないのだ。
あの当時の留美は、それこそしゃかりきになって剣道部を盛り立てようとしてきた。
楽しかったか、と訊かれても言葉に詰まるくらいに。
頑張った。それは断言できる。しかしそれは、ほとんど針のむしろだった。
「ずっと陰口とか叩かれたりした。一部で嫌われてたのも知ってた。それでも、一年やり通したの、あたし。部も大きくなったし、大会でも好成績を収めるようになった」

うつむいていたけれど、何となく浩平の視線を感じる。
留美は一度顔を上げ、小さく笑った。
「最後の試合が終わった時、一年前にあたしを部長に推薦してくれた先輩が言ってくれたんだ。辛い役回りだったけど、よくやってくれた。ここまで部が大きくなったのも、おまえのおかげだって。それで……もう面なんて被るな。違う人生を生きろ。髪を伸ばしてリボンをつけろ。そうすれば違う幸せがおまえを待ってるよ、って……」
しゃかりきになって、無様なくらい頑張って。
先輩以外に誰もねぎらいの言葉をかけてくれなかった留美にとって、その言葉は神託に近い響きを持っていた。すがるものはそれしかなかった。
「あたしはその言葉を聞いて、その通りにしてみるまで気づかなかったんだ……女の子としての幸せに」
女の子は何でできてるの？
お砂糖、スパイス、素敵なものみんな。
マザーグースの詩のように、留美にとって可愛らしい『乙女』というものは本当にこんな風に見えていた。
そんな乙女になる為に、まるで剣道の練習と同じように、留美は必死で乙女になろうと

していたのだ。
浩平が突然、頬をぐにゅぐにゅとこね回す。
「可愛い奴だな、おまえは」
「えっ？　何だか知んないけど、ありがと」
少なくとも今の浩平の眼には、留美は乙女として映っている。
それだけで充分だった。
その頬に触れている指が、小さく震えた。
「折原……？」
留美に笑いかけていたその眼から、表情が薄れてゆく。留美の言葉が聴こえないかのように、ひどく悲しそうに立ち尽くしていた。
まるでこの世の誰にとっても、浩平という存在が意味をなさないかのように。
それは、初めて見る浩平の顔だった。
「折原っ、どうしたのよっ！」
軽く頬を叩くと、やっと浩平の眼に意志の力が甦った。
「七瀬」
「気分悪いの？」

一瞬だけ浩平は戸惑ったように視線を落とした。
そして、顔を上げる。
「なぁ、七瀬……抱いていいか」
その声には、表情ほどの重さは感じなかった。どちらかと言うと、ふっと口から出たような響きだった。
それまでの辛そうな表情でなくなっていたこともあり、内容の重みでさっきの違和感がすっかり消え果ててしまう。
もちろん、全く考えてみなかったことではない。
一番大好きなひとと初めてすることは、ちゃんとつきあっている恋人同士なら避けては通れないことだ。いつかはそうなる。そう思ってはいた。
しかし、教室でいきなり言い出されるとは考えてもいなかった。
浩平が腕を回してくるのを、留美は慌てて遮った。
「こ、こんなところじゃやだっ。いくら何でも場所が……っ」
さすがに教室でいきなり初体験というのはあんまりだ。
「じゃ、どこだったらいいんだ？」
浩平が不思議そうに訊いてくる。

セックスしたい場所を指定してみましょう。
その意味に、留美は思わず真っ赤になってしまう。
「そ、そんなこと訊かないでよっ」
こういう問題は、男性の方がリードしてくれるものだと思っていた留美は、どう言ったらよいのか解らず、視線をそらした。
浩平は留美の気持ちが解らないのか、軽くいなすように言った。
「じゃあ、ここで」
「待って！　やっぱり最初はっ、男の子の部屋がいいかな……っ」
一番好きな男の子が、いつも暮らしている部屋。そこで、誰よりも近く、触れ合えるほど親しくなった相手として招かれる。
そんなシチュエーションなら、そうなってもいい。そう思った。
「俺の部屋？」
留美の頬は顔の温度で火事を起こせそうなほど熱くなった。
そのままおぼつかなげにうなずく。
浩平はしばらく考え込みながら留美の顔を見ていたが、やがてうなずいた。
「解った。じゃあ、俺の部屋だ」

とんとん拍子に話が進んでしまい、留美は墓穴を掘ったと後悔した。
「じゃ、行くぞ」
浩平は廊下に向かって歩き始めた。

その話からそらしたくて、留美はほとんど躁状態だった。
「あっ折原っ、ゲーセン！　何か新しいのが入ってるかもっ」
「明日にでも存分、時間を費やすとしような」
「今日限りのがあるかもっ！」
「安心しろ。ない。お前、あからさまに本題から逃げようとしてるだろ」
浩平がじろりと留美を睨んだ。
救いを求めるように、留美はあちこちに視線をさまよわせる。
「そんなことは……ああっ！　さっ、魚屋っ」
「それがどうした」
「なんか、いい魚が入ってるかも」
「よし、明日一緒にさばこうな」
数メートルおきに叫び声をあげる留美に、浩平は溜息をつきながらも応酬する。

パニックでまともに考えられない状態の留美にとって、浩平の家に着いたのはあっという間だったような気がする。
鍵を開けている浩平に、留美が最後の救いを求めて訊く。
「い……家の方はっ？」
「大丈夫だ。夜まで帰ってこない。ほら、上がれよ」
今年に入って数回来たことのある浩平の家は、相変わらず人気がなかった。
「お茶入れてくるから、部屋で待ってろよ」
「う、うん……」
留美は心細い様子で二階への階段を上がった。
（どうしようどうしようっ！　あたし折原と……うわあっ）
こういう時、心細い乙女は何を味方にしてその場に臨むのだろう。
この時の為に用意した特別に可愛らしい下着も、先に経験をすませた友達のアドバイスも、留美にはなかった。
扉を開け、少し馴れてきた浩平の部屋の中に足を踏み入れる。
散らかった部屋で唯一座ることのできるベッドに、いつも通り座ろうとしたが、生々しい想像をしてしまいそうで、結局は床を軽く片付けて座ることにした。

部屋の中に残る浩平の気配に、何となくせつなくなってくる。
しばらくすると、浩平はトレイに日本茶を乗せて部屋に入ってきた。
「七瀬、お茶でも飲んで落ち着け」
差し出された湯呑みを機械的に受け取る。
浩平は床に座っている留美を少し困ったように見ると、自分はベッドの方に座った。
そもそも床にそれ以上のスペースがなかったというのが正解だ。
それから、留美は無言でお茶を飲み始めた。
平静を装ってはいるものの、ベッドがきしむたびに思わずびくっ、と引きつってしまう。
お茶がこぼれなかったのが不思議なくらいだった。
長い長い沈黙の末、浩平がどっと疲れた様子で口を開いた。
「俺達、何してるんだ？」
「お、お茶飲んでるんじゃない」
「ま、そうなんだけど、退屈じゃないか……？　もっと別のことしないか？　例えばゲー」
進退極まった瞬間、留美は半分開き直った。
湯呑みをデスクに置くと、うつむいて呟いた。
「わ、解ったわよ。でも、どうしたらいいのか解らないのよ……は、初めてだからっ」

ベッドが軽くきしみ、浩平の気配がすぐ側に移る。

浩平の顔が留美に近付いてきた時、とっさに手許にあった何かを持ち上げた。テレビのリモコンだった。

「あ、お、大相撲の時間っ」

反射的にリモコンのスイッチを入れてしまうと、父の好きな大相撲中継が流れ出した。

『……錦ノ海は先場所より体に艶がでてきましたねぇ。対する浜の山、まわしの色を変えての今場所はどうで』

「こらあぁっ！」

おもむろに浩平がリモコンを取り上げてテレビを消した。

今までとのあまりのギャップに、留美は笑い出してしまった。

「BGMを相撲中継なんかにするなぁっ!!　まわしの色なんか聞きながら、キスしたくないわっ」

「き、気になるじゃない……賜杯の行方」

もちろんそんなものは家に帰って親にでも訊けば解ることだ。

「そんなに相撲が好きなんだったら、誕生日は関取のブロマイドで決定だな」

「そんなあ。冗談だってば……」

「じゃあ、もうふざけるなよ」
そう言いつつも、浩平はそれ以上留美に顔を寄せようとはしなかった。
大きな溜息が漏れる。
「やめとくか。そんな雰囲気じゃなくなっちまったしな。相撲でも見るか」
浩平はもう一度リモコンを点けようとする。このまま二人で相撲を見て帰るのも悪くはなかった。
しかし、留美は浩平の手を掴んでいた。
「待って……どうすればいいの？　キ、キスしようとしてたんだっけ」
「そうだけど」
留美は浩平の首に腕を回していた。
わずかに開いた唇を寄せ、触れたままじっとしている。
しばらくすると、浩平の舌が留美の口の中にするり、と入ってきた。
（舌って……そ、そうよね）
そのまま留美の舌を探し当て、触れる。映画では、舌をからめて情熱的なキスを交わしていた。それと同じようにとは到底言えない不器用さで、そっと舌をからめる。
浩平が吸ってくると、唾液の音がたつ。思わず引っ込めてしまうと、また舌を差し入れ

られる。そんな風に、長い長いキスを交わしていた。

触れた唇が、舌のざらざらとした触感が心地よかった。そのせいで一層、体が熱くなっていってしまう。

唇を離した時には、互いの口の周りは唾液でべたべたになっていた。

漏れた息が不規則に荒い。

「七瀬」

浩平が留美の制服のボタンに指をかけ、ひとつずつ外してゆく。

その瞬間。びくっ、と留美は震えた。

乙女になりたい。その願いにすがるしかなかった頃の自分が、制服に染みついているような気がした。

初めてのセックスへの心細さを紛らわせるものを、何ひとつ持っていなかった留美にとって、それは最後の拠り所だったのかもしれない。

「折原……このまま、着てちゃ駄目？」

「いいけど、何で？　皺になるかもしれないぞ」

「それでもいいから……お願い」

留美の視線に混ざった脅えを理解したのだろう。浩平はうなずいてくれた。

「解った」
そう言うと、はだけて一部だけ肌が見えているままの留美を、ベッドに横たえた。
浩平がショーツを下ろそうとした時、その部分が濡れていることに気付き、思わず膝を合わせてしまう。
太腿をぎゅっと閉じ、その部分が見えないように抵抗した。
そのまま、ひどくやりにくそうに浩平がショーツを下ろした。
浩平はズボンを脱いでトランクスを下ろしながら、その部分に眼をやり、思わず呟く。
「う、うーん……こういう下着って、高く売れるんだろうなあ……」
「馬鹿あっ、どうしてそんな風にいじめるのよぉっ」
「いや、悪い悪い。七瀬……入れるぞ」
そう言いながら、浩平は留美のその部分に指を差し入れ、そっと動かした。
くちゅ、と音がたつ。留美はその音がひどく恥ずかしくて、瞼をぎゅっと閉じた。
浩平が自分の性器をそこにあてがった。
先端の部分だけがつぷ、と呑み込まれる。
そこまでは痛みはなかったが、浩平がそれ以上奥に挿入すると、いきなり激痛が走った。
「う、く……っ」

痛いなどというレベルではなかった。
浩平がその部分に突き立てるたびに、体が半分に裂かれてしまうかのように感じる。
「七瀬」
囁きながら、浩平が顔を寄せてくる。荒い息を堪え、留美にそっとキスをする。
浩平が自分を好きでいてくれること。大切にしてくれること。それがじんわりと体温と一緒に伝わってくるようで、留美は幸せだった。
浩平が苦しそうに達するのを堪えている。
留美の痛みを紛らわせるように、髪を撫で、キスしてくれる。
(あたし……大事にされてる)
多分、浩平にとって長い間一番親しい異性だった瑞佳とは違う意味で、触れ合うことが特別な意味を持つ関係になった留美を、愛しく思ってくれている。
「折原、大好き」
それが嬉しくて、留美は浩平にしがみ付いた。
浩平がその言葉に答えるように笑いかけてくれる。
「七瀬……っ」
浩平が達した後も、二人はしばらくそのまま抱き合っていた。

浩平の重みに、肌の触感に馴染んでゆく。こんなに側にいることで落ち着いた気分になったのは初めてのことだった。

帰り際、玄関まで見送りに出てくれた浩平に、留美は恥ずかしそうに笑いかけた。
つい一時間も前にしていたことを考えると、浩平の顔を直視できなかった。
「じゃあ、また明日ね」
「ああ、またな」
夕暮れの色が、夜の沈んだ色に混ざって濁った、濃い色に変わってゆく。
その暗くなりかけた陽光に照らされた浩平の顔に笑顔が浮かぶ。その姿が一瞬、ひどくかすんだようにも見えた。
暗いせいだろうか。
浩平はそれまでと変わらず笑顔を向けてくれているのに、何故かすぐ側にいないない幻覚のように存在感がなくなっていた。
「……折原、疲れてる？」
多少のタイムラグがあってから、浩平が口を開く。
「まあ、そりゃな。だけど七瀬の方がしんどいんじゃないか？」

「それはいいのっ」
歩くのにも腰が引けてしまって、ひどくみっともない状態だった。
「送ろうか」
「ううん、折原こそちょっと休んだ方がいいよ。じゃ」
もう一度浩平に手を振って、留美は歩き出した。
ややあって後ろから扉の閉まる音がする。
留美は、一度振り返って誰もいない扉の前を見つめた。

(何だか……変な感じがする)
浩平のことが好きだから、いつも気にかけているからこそだろうか。
彼の周囲に感じる奇妙な違和感を、どうしても忘れることはできなかった。

第7章　プレゼント

あれ以来、浩平と一緒にいる時間は激増した。
それまで毎日浩平を起こしに来ていた瑞佳が、気を利かせて留美にその役割をバトンタッチしてくれたのだ。
至れり尽くせりだったらしい瑞佳の起こし方に馴れていたせいか、浩平はしばらく留美の遠慮がちな起こし方では瞼を開いてさえくれなかったが、二日目の今日には起きてくれるようになった。
休み時間がくると、瑞佳と一緒に廊下へ出て、起こすことに成功した話を報告する。
「浩平が起こしてすぐ眼を開いたの？　それってすごいよ」
「そ、そうなの？」
「だって、浩平って、余計に寝る為なら何だってするんだもん。馬鹿なことで他人を驚かそうとするし。前なんかねえ、クロゼットの中に寝てたことがあったんだよ」
「う……っ、瑞佳、それ、見つけたの？」
他人を驚かせる為だけにそんなところで寝る浩平も凄いが、それをちゃんと発見して学校まで連行してくる瑞佳も只者ではない。
「うん。でも、きっと浩平が早く起きようとしたのは、七瀬さんの為じゃないかなあ」
「そう……かなあ？」

長い間、浩平の一番近い異性だった瑞佳が、嬉しそうにそう言ってくれると、何となく気負いが消えてゆくような気がした。
「折原にとって……あたし、特別かなあ」
「当たり前だよ。浩平、すごくすごく七瀬さんのこと大事にしてると思うよ」
始業のチャイムが鳴る。
二人は慌てて教室に入った。

その日の放課後。
いつものように浩平と一緒に帰ろうとした時、ちょうど雨が降り始めたところだった。
天気予報では降水確率が40パーセントくらいだったので、降らないだろうとたかをくくったのが間違いだったらしい。
「折原、傘は？」
「持ってない」
そんなことを言っている間に、傘を持った生徒達は悠々と、そうでない生徒達は開き直って外へ駆け出してゆく。
「どうする？」

「いいんじゃない？　止むまで待っていれば」
「そうだね」
しばらくこうして浩平と一緒に立っているのも悪くなかった。
風は強く拭いているものの、雨はさほど激しくなく、気温が温かいせいで傘を持たない生徒もそのまま走り出してゆく。鞄を頭に乗せて、傘代わりにする生徒もいた。しばらくすると、そんな生徒達も少なくなり、下駄箱のあたりには人気がなくなってきた。
浩平の横顔を見ていると、何となく愛しさがこみ上げてくる。
「あのさ」
「ん？」
誰も通らないのを確認して、留美はそっと浩平に寄り添った。
かすかに笑うと、浩平も留美の肩に右の掌を置いて、自由な左手で頬を引っ張ったりしている。
それはいつものことだった。
やわらかな留美の頬を、楽しいおもちゃで遊ぶように引っ張ったり、つまんだりする。
「ねへ、やふだお」
頬をつままれたまま、留美は空を指差す。

浩平は頬から手を離した。
「あ、ほんとだな」
厚い雲の隙間から、何条もの光が差し始める。
風でどんどん雲が動いてゆき、気持ちいいほどあっけなく陽光が戻ってくる。
吹き飛ばされてゆく雲が、明るい色に変化していった。
「じゃ、そろそろ帰るか」
校門を出る頃には地面に影が射すほどに明るくなり、道を歩いている間に、雲のアウトラインはみるみるピンクに色づき、空の赤はどこまでも純度を増してゆくようだった。
浩平はひどくはしゃいだ様子で、飛び跳ねるように道を歩く。
ばしゃんばしゃん、と豪快に踏んでゆく水たまりが、浩平のズボンに茶色の染みを付けていった。
ぽうん、と大きな水たまりを越えて、嬉しそうに振り返る。
「七瀬。ほら、ここまで来いよ」
子供のように笑いかける浩平に、留美は苦笑した。
「そんな水たまり越えられないって」
「七瀬はスポーツ少女だったんだろ？」

越えて越えられなくはないような気もしたが、留美はにっこり笑って首を振る。
「うーん、無理だと思うよ」
「ま、やってみなって」
「じゃあ、いくよ？　泥が飛び跳ねても知らないよ」
笑顔のままで留美は水たまりに向かって小走りで進んだ。
跳んでくれると信じきっている浩平の顔を見て、留美はわざと歩幅を狭める。大げさなジェスチャーで、ちょうど真ん中に着地してみせた。
その直後、水しぶきが派手に浩平にかかった。
「おまえ、わざとだろ。七瀬なんだから駅のホームからホームに飛び移れるぐらいならたやすいはずだろ」
「いつそんなことができるって言ったのよっ」
普段以上に浩平は子供っぽく見えた。
それにつられて留美も、子供時代に戻ったようにはしゃいでみせた。
浩平の笑顔が、夕陽で真っ赤に染められる。
真っ赤な陽光で染められているせいだろうか。その笑顔は凍りついたように、動きを止めたように思えた。

笑顔のままなのに。
いつもの浩平と変わらないのに。
留美には何故かひどく悲しそうな顔に見えた。
(折原……どうしたの?)
問い質してしまうのが怖かった。
何か、とてもおそろしいものがぬるりと現れて、今までの楽しかった時間はおしまいだよ、と告げられそうなそんな薄気味悪さがあった。

どれだけ時間がたったのだろう。
夕陽の赤は薄れ、闇に消えてゆきつつあった。
「七瀬……」
浩平が掌を握った。
「えっ?　どうしたの?」
さっきの違和感を口にしてしまうのが怖かった。
悪魔の話をすると、悪魔が来るよ。そんな風に現実になってしまいそうで嫌だった。
必要以上に無邪気そうな表情にも、浩平は気付かない。

「いや……何でもない」
力を入れているはずの掌の触感が、ひどく薄っぺらに思える。隣にちゃんと存在している人のような気がしなかった。
ゆらゆらと消えてゆく、まぼろしのように。
「あっ、そうだ！　ジュースでも飲もうよ」
そんな恐怖を打ち消すように、留美は自動販売機を指差してみせた。

翌日の昼休みがそろそろ終わろうという頃、留美は瑞佳に呼び出されて廊下に出た。
「あのね、ちょっと訊きたいことがあって……」
何故かひどく戸惑ったような表情に、留美は嫌な予感がした。
「七瀬さん、浩平と何かあった？」
瑞佳はしばらく戸惑ったような表情でうつむいていたが、やがて言葉を切り出す。
「どうして……？」
あの日の浩平のことを思い出して、留美は一瞬身構える。
「浩平にね……、訊かれたんだよ。『お菓子の国の王子様と盟約を交わした女の子』の話」
「なに、それ？」

　瑞佳はゆるゆると首を振った。
「解んないけど、譬え話みたい」
　瑞佳は途中何度か首を傾げ、訂正を挟みながらその話をしてくれた。
　お菓子の国のお姫様になりたいと願った女の子がいた。その願いは強く、お菓子の国は本当に生み出される。
　そして、女の子はそのお菓子の国に住む王子様と盟約を交わす。
　一緒に暮らそう、と。
「これって何なのかな。七瀬さん、心当たりある？」
「ない……けど」
　単純すぎるほど単純な、愛らしいおとぎ話。浩平が何かを喩えるのに、これほど不似合いなものもないだろう。
　それだけに余計に、留美は不安を感じた。
　それは、何か浩平の現実を端的に形容したものなのではないだろうか。
「で、瑞佳は何て答えたの？」
「王子様が盟約の実行を迫るのなら、その女の子はお菓子の国に連れていかれて、この世界からいなくなっちゃうんじゃないか、って」

いなくなる。
留美は今まで浩平から感じ続けていた違和感の正体を知ったような気がした。
どんな理由かは解らない。しかし浩平はいなくなろうとしている。
強張った表情のまま黙っている留美に、瑞佳は言葉を続けた。
「それとね、浩平、変なことも言ってたよ」
「何を……」
「俺とお前の出逢いは、いつ、どこだった……って。それで、わたし、思い出せなくて……
でも、わたし、浩平とどこで逢ったんだろう」
忘れられてゆくというのも、ひとつの『いなくなる』だろう。徐々に、みんなの気付かないうちに浩平はいなくなりつつあるのかもしれない。
もう堪えられなかった。
留美はうつむいて考え込み始めた瑞佳を置いて、そのまま廊下を歩き出していた。

浩平と二人きりになるのが怖かったが、それでも放課後はやってくる。
「なあ、七瀬……」
浩平が強張った顔を向ける。

「どうしたの？」
ただ、いつものように笑うしかない。
浩平を大事に思っている現実の存在として、消えてゆこうとしているどこかのことを、気付かない振りをしなければならない。
その笑みをしばらく無言で見つめていたと思うと、浩平は悲しそうに首を振った。
「もしかして、寂しかった？　今日は休み時間とかも、あんまり話せなかったし」
「ああ、そうかもな」
浩平もうっすらと笑いかけてくれる。その笑みが痛々しい。
「ごめんね」
「いや、俺だってそこまで縛り付けたくないし」
「ううん、正直嬉しい。席もすぐ前だからさ、もっと休み時間は話そうよ」
「ああ、そうだな」
浩平はうなずきながらも留美から眼を離さないでいる。
留美はそっと浩平の頬に掌を触れる。
「でも、そんなに折原があたしのことを思ってくれるなんて驚いた」
「ああ、俺自身もだよ」

そんな悲しい顔をしないでほしかった。
それでも、留美は笑うしかない。
いつも通り、浩平を好きでいる自分はここにいるのだ、と。

それは、真実を遠くからしか類推することができない留美だからこそ、感じた何かなのかもしれない。
砂の山が少しずつ崩れて形をなくしてゆくように、浩平の気配が他の全ての人間から薄れてゆこうとすることを、留美だけは拒否したかった。

クラスメートの記憶から。
担任の髭からも、浩平と仲のいい住井からも、小学校以来のつきあいである瑞佳からも、浩平に向けられる視線が減ってくる。
まるでどうでもいいもののように、道路標識の方がまだましだという視線が一瞬からみ、そのままそらされるようになってしまったのに気付いた翌日。
浩平は学校を休んだ。

浩平を忘れた人々をなじることもできず、かと言って消えてゆこうとする浩平を責めることもできず、翌日、留美は何事もなかったように浩平の家に向かった。
瑞佳に教えられたように、勝手に玄関脇のポストの裏にマグネットで貼り付けられた鍵を取り出し、そのまま扉を開ける。
「おじゃましまーす……」
小声で挨拶をすると、留美はそのまま二階へ上がっていった。
浩平の部屋の扉をそっと開け、閉められたカーテンを思いきりよく引いた。
「ほら、起きなさいよーっ！」
その声で、閉じていた浩平の瞼はぱちっ、と開いた。
「七瀬……」
「あのさ、勝手に上がりこんだりしてよかったかな」
「いいよ、誰もいないし」
浩平は苦笑しながら上半身を起こした。
「瑞佳も、最近じゃ寄らなくなったみたいだよね」
昨日浩平の名前でぴんときていなかった瑞佳のことを思い出す。
今日が限界のような気がした。他のクラスメートに浩平の存在を認知させなければ、そ

のまま浩平は忘れ去られてしまうのではないだろうか。
「ほら、早く起きようよ」
留美は浩平の手を引っ張って、立ち上がらせようとした。
「なあ、学校さぼって、二人で一緒にいられないかな……七瀬と、一緒にいたいんだ」
「学校でだってずっと前の席にいるんだし、休み時間だって一緒にいられるよ」
「べたべたしたいんだ。学校でもべたべたさせてくれるんだったら行ってもいいぜ」
「学校なんかでくっついてたらやばいって」
浩平の眼が、傷付いた子供のように外界を拒否する。
「だったら、さぼってここにいよう」
「駄目。休む理由なんてないもの」
どうしても他の人に浩平をもう一度馴染ませたかった。
崩れ去る前なら、それも可能だと留美は信じていた。
浩平がすねたように溜息をつく。
「長森みたいなこと言うな、やっぱ」
世話焼きの、可愛らしい瑞佳の笑顔が浮かぶ。もし瑞佳が本当に浩平を忘れきっていたら、浩平は回復不可能なダメージを受けるに違いない。

もとより、このまま学校に行っても間に合うかどうかも解らないのだ。
そのことで浩平が傷付きたくないのなら、ここにいた方がいいのかもしれない。
「……だったら、そうしようか？」
留美がベッドの縁に座り込むと、浩平も布団から出てきて隣に座った。

何をするでもなく、ただ側にいて、キスを交わし、今まで作ったこともないインスタントラーメンをめちゃくちゃな状態で作り、二人きりでただ遊んだ。
その時間はとても楽しかった。
楽しかったけれど、浩平の姿が他の人の間にどれだけ残っているのかを考えると、不安でならなかった。
夕方近くになって、留美は支度をして玄関に向かった。
「明日は学校に来なきゃ駄目だからね、折原」
「解ってる」
「それじゃ、また」
手を振ってみせると、浩平はやや遅れて手を振り返した。

翌日。
留美が登校した時にはもう、何かが変わってしまっていた。
「え……っ」
どこがどう違う訳でもなかった。
クラスの中はいつも通り賑やかで、他愛ない話をしながら授業の準備をしている生徒達の横を通り抜けてゆく。
いぶかしく思いながら席につこうとする留美に、住井が顔を向ける。
「七瀬さん、おはよう」
「おはよう……折原、まだみたいね」
「折原……？」
住井の不思議そうな表情を見て、留美は顔を強張らせた。
「誰かと待ち合わせしてるの？　そろそろ授業始まるけど」
住井は仲のよい友人であるはずの折原浩平について、憶えていなかったのだ。
（間に、合わなかった……？）
昨日何がどうあっても浩平を引きずってくるべきだったのかもしれない。後悔しながらも、留美はたったひとつの救いを期待した。

（瑞佳なら……！　憶えてあげていてくれるよね）
すっかり準備を済ませて、友達と喋っている瑞佳のところまで走る。
「瑞佳、おはようっ！」
「七瀬さん、おはよう。どうかしたの？」
留美の形相に驚きながらも、瑞佳は笑いかけてくれた。
「あの……折原のことなんだけど」
「折原って、誰だったかな。わたし、心当たりがないんだけど……」
申し訳なさそうに首を傾げる瑞佳に、留美は思わず詰め寄った。
「だって！　あたしおとトい折原のことを相談したばっかりじゃない」
「え……っ？」
瑞佳の顔から、表情が剝がれ落ちてゆく。
知らないのだ。10年以上のつきあいである浩平のことを、瑞佳は知らないのだ。
留美は絶望のあまり、声も出なかった。
「ねえ、七瀬さん。その折原ってひと、何か大事なことに関係あるひとなの？　わたし、頑張って思い出すから」
心配そうに留美の顔を見る瑞佳に、留美は首を振った。

始業のチャイムが鳴り、仕方なく留美は席に戻る。
(まだ、そう決まった訳じゃない……)
浩平の顔を見さえすれば、きっとみんな思い出してくれる。その期待を留美はまだ捨てていなかった。
(折原、早く来なさいよ。馬鹿あっ)
授業が始まってからも、何度も窓を見たり扉を見たりしながら、留美はただ浩平が来るのを待っていた。

浩平の来ないまま放課後を迎えた留美は、仕方なく家への道を辿った。
帰り道、向こうから浩平がくるのを期待しながら、前を見て歩く。それでも浩平の姿を見つけることはできなかった。
(折原、大丈夫なのかな)
機械的に足を動かしていた留美は、思ったより早く自宅に着いてしまった。
玄関のところで溜息をついて、鍵を開ける。
(今からでも折原の家に行こうかな)
部屋着に着替えながらも、浩平のことが頭から離れなかった。

ブラウスのボタンを留めている間に、電話のベルが鳴った。
まだ母は帰ってきていなかったので、自室に持ってきてある子機のボタンを押し、電話を取った。
『もしもし……』
「もしもし？」
聴き間違えるはずもない浩平の声だった。電話の音が悪い。公衆電話なのだろう。
「何やってんのよ。学校休んだりして」
今日のことを浩平に告げる勇気が出なかった。
その分どうしてもぶっきらぼうな口調になってしまう。
『……忙しかったんだ』
浩平の声は、ひどくやさしかった。
留美はそれが悲しくて、わざとお説教じみた言葉を並べてしまう。
「いくら忙しくても来なくちゃいけないの、学校ってところは……もう、寂しかったんだからね」
『悪い』
同じ市内からかけているとは思えないノイズのせいで、浩平の声がまともに聴こえなく

なる。その時、ピーッ、とコインがなくなることを知らせるアラームが鳴った。
どうやら硬貨を一枚投入したらしい。
『えーとだな、七瀬……ドレスを送ったんだ。きっと、似合うと思うよ』
子供っぽくて、初めてのセックスの時でさえムード台無しの言葉を漏らしてしまう浩平が、いきなり何を思ったのだろう。
「ちょっ、ちょっと待って！　ドレス？　いきなりどうしたの」
「贈りたかったんだよ、ただ単に」
いつもは、こんな風にロマンティックな言葉をくれない浩平が、何のてらいもなく素直にそう告げてくれる。
「本当？　何か裏がありそうだけど」
『本当に送った。嬉しくないのか、七瀬？』
「じゃあ、嬉しい。それ以上に不可解だけど。だって、そんなに折原に甲斐性あるなんて思えないもの。高かったんでしょ？」
小金を貯めて堅実な生活を送るというのは、浩平の性格からいくとあまり似つかわしくなかった。
しかし、浩平は平気な声でこう返す。

『そりゃ、そういうもんだからな。貯金ぜんぶはたいたよ。クリスマスのプレゼントとかなかったしな。代わり』
「折原って、貢いで悦に入るタイプなのかな……」
物が欲しい訳ではなかった。
浩平といられること。一緒に作ってゆける思い出。確かにドレスは留美の憧れだったけれど、ドレスよりも浩平本人にいてほしかった。
しかし、浩平はとんでもないことを続けた。
『それでな、七瀬……ダンスフロア予約した』
「ええっ!?　嘘でしょっ？　いつによ」
『今日、夕方。5時から』
動転する留美とは対照的に、浩平の声は落ち着いていた。
「待ってよっ、急すぎるって！」
『だからドレスを送ったんじゃないか』
「そんな……間に合うのっ？」
配達の径路や道路の混み具合で、いくらでも到着時間は変わってしまいそうだ。
『多分。だから、ドレスが着き次第、来てほしいんだ。あの、高台の公園で待ってるから』

恋人から贈られたドレスを着て、ダンスホールで踊る。そんなシーンを何度も夢見てきたのは事実だ。
王子様の腕に抱かれて、滑るように踊り出す。
憧れがなくなった訳でもなかった。
頼りなげな声で問い質してしまう。
「ねえ、折原……全部、嘘？」
『いや、全部本当だって』
「信じられな」
玄関のインターホンが無遠慮に鳴らされる。
『じゃあ、切るよ。すぐそれ着て、高台の公園な』
「そん……」
留美が言葉を発する前に、電話は切れていた。
「七瀬さーん、お届け物ですが」
「はいっ、今行きますっ」
留美は慌てて玄関の方へ走った。

そのドレスは湖の深い色を思い起こさせる、独特の色だった。
箱から取り出したそれは、光線の加減で微妙に色合いを変える生地のせいで、留美の眼にはきらきらと輝いているかのように見えた。
（こんなの……絶対高かったわね）
浩平はどんな顔をして、このドレスを買ったのだろう。
恥ずかしさの余りに後で文句でも言ってくれればいいと留美は思った。いつもの、ムードのない型破りな浩平にしては決まりすぎているのだ。
しかし、着替え終わった頃にはもう約束の時間をわずかに過ぎていた。
留美はそれ以上考えるのをやめて、手早く着替え始めた。
浩平の贈ってくれたドレスを身にまとい、ほとんど使っていないシルクの白いリボンで髪を後ろでひとつに結んだ。
フェミニンなこのドレスにツインテールは似合わない。
鏡で確認すると、いつもよりも大人びたイメージの自分が映っている。
服装の乱れがないことだけを確認して、留美はお気に入りの靴を出しに玄関まで歩いてくると、丁寧に靴を揃えた。
その後で、服と一緒に入っていた長手袋をそっとはめる。

すべすべの、気持ちいい触感に留美はどきどきした。
(このドレスで……浩平と踊るんだ)
留美は何かを覚悟したように、自分の家を早足に出た。

留美が公園に着いたのは、5時15分を過ぎたところだった。
いつもは早足の留美も、ドレスを着崩さないようにと思うと、どうしても足は遅くなる。
しかし、浩平だけでなく、誰の姿も公園にはなかった。
(何よ、あいつだってまだ来てないんじゃない)
奇妙なシチュエーションで呼び出されて誰もいないのでは、あまりにも情けない。しかも、このドレス姿で誰かを待っているのは死ぬほど恥ずかしかった。
留美は口を尖らせながらも、辺りを見回してみる。
もしかしたらあの浩平のことだ。どこかで隠れて留美の動転する様子を見ているのかもしれない。
さわさわと葉ずれの音がする。
時折、側の道を近所の人が何人も通り過ぎてゆく。
時計の針と風だけが、留美に時間の過ぎてゆくことを痛感させた。

風が、止まった。
「え……っ」
一瞬浩平に呼ばれたような気がして振り返る。
ぱたぱたぱた、と足音が遠ざかっていった。
「折原っ⁉」
その足音の主を追って、留美は走り出す。
軽い足音の主は、留美が道に出た時にはもう、角を曲がるところだった。
「あっ、ちょっと待って……っ！」
子供だった。
それも小学校低学年くらいの女の子だった。
長い髪をなびかせた少女は、ほんの一瞬だけ留美の方を見て、そのまま角を曲がってしまう。
少女が消えた途端、再び風が吹き始めた。
（なに……なにが、おこってるの）
何故か背筋に寒気が走った。

留美はあの少女から、何度か浩平から感じ取った違和感と共通する何かを感じていた。
とても遠くにいるような、自分達とかけ離れた世界にいるような感じが薄気味悪かった。
『王子様が盟約の実行を迫るのなら、その女の子はお菓子の国に連れていかれて、この世界からいなくなっちゃうんじゃないか、って』
瑞佳の言葉を思い出す。
女の子が連れて行かれるように、浩平は誰かに連れて行かれたのだろうか。
だとしたら。
「行っちゃうのなら、どうしてドレスなんか贈ったりしたのよ……っ！」
最後の最後で恰好つけて、理想の王子様をすんなりこなして。
王子様は舞踏会に現れなかった。
「あたし、信じないよ……折原。折原はあたしの王子様なんだから、ちゃんと、迎えに来なきゃ駄目なんだからっ」
泣きたくはなかった。
留美は溢れようとする涙を堪えて、ただ、宙を仰いだ。
やがて、濃紺に染まろうとする空に星が現れる。
留美は長い間、その星を見上げ続けていた。

第8章 ギャップ

それから留美は休みが来るたび、ひたすらあの公園にドレスを着て立ち尽くした。それが変人呼ばわりされる行為であるのは言うまでもなかった。数週間もしないうちにその近所では知らぬものもない名物となってしまっていた。

時々通りがかる近所の人達が、小声で留美のことを噂しているのがよく聴こえた。

(ほっといてよっ。あたしだって恥ずかしいんだから)

閑静な住宅街の中にある小さな公園で、夜用のドレスがどれだけ浮いているかは留美が一番よく知っているのだ。

ドレスが汚れないように、どこかに座る訳にもいかない。

ただ、その公園で立ち尽くしているだけだった。

新年度になり、浩平など最初からいなかったように月日が過ぎてゆく。

「また今年もよろしくね、七瀬さん」

二年で進路決定があるせいで、三年になる時にはクラスは持ち上がりになっている。

浩平がいなくても相変わらず人の好い瑞佳は、三年生になっても留美に人懐っこい笑みを向けてくれる。

「うん」

留美もうっすらと瑞佳に笑みを返す。
その笑みを見ると、どうしても彼女にとってそもそも存在しない少年のことを思い出してしまう。留美がそうなりたくてたまらなかった、浩平と一番親しく喋ることのできていたあの頃のことが忘れられない。
「どうしたの……？」
心配そうに瑞佳が留美を見ていた。
言っても仕方がないことなのだ。存在しない幼馴染みの話をされても、瑞佳はただ困惑するしかないのだから。
「ううん、何だか春は眠くなっちゃうよね」
「七瀬さんってば……」
瑞佳はほっとしたように笑いを漏らした後、ふと、奇妙な表情を浮かべた。
「わたし、こんな話……誰かにしたような気がする」
寝坊の幼馴染みをいつも起こしに行っていた瑞佳。浩平が消えてしまっても、その全てが消えている訳ではない。誰とも知れぬかすかな記憶が、留美の大好きな浩平のわずかな痕跡だった。
不安げな眼を向ける瑞佳に、留美は苦い笑みを浮かべて首を振る。

「みんな、春は眠いからね。きっと、誰かにそんなこと言われたんじゃないの？」
「そうだね。多分」
瑞佳はそれ以上こだわらずにもう一度笑みを浮かべた。

形だけはクラスに馴染んでいながらも、休みになるたびに留美は公園に立つ。
ぽつり、と頭に水滴が落ちてきたと同時に、雨がまばらに降ってきた。出かける時には曇っていたが、傘を持ってきていなかったので、せいぜい木陰に隠れるしかない。
（止んでくれるといいけど）
心細そうに木陰に立っている留美は、雲の合間から見える陽光が広がっていってくれるのを期待していた。
しかし、雨はひどくなりこそしなかったが、そのままぽつぽつと振り続けていた。
走って帰れなくはないが、このまま待ち続けているのも馬鹿馬鹿しいくらいには雨量を保ち続けている。
「何やってるのよ、七瀬留美」
すぐ側に、誰かが来ていることに留美はその瞬間まで気付かなかった。
「……え？」

肩を叩かれ、おずおずと振り返る。
そこに立っていたのはひどく意外な人物だった。
「広瀬さん……」
二年の時に、あれほど激しい反発を見せてきた広瀬真希だった。
その真希はむっとした顔のまま、留美に傘を差し出している。
「入りなさいよ」
「どうして、ここに」
不機嫌そうな真希は、すぐ近くの一軒家を指差して見せる。
「あそこがあたしの家。ここを通りがかって文句言われる立場じゃないと思うけど？　ほら、来なさいよ」
そう言うと真希は、そのまま歩き始めてしまう。
留美は何となく真希の傘に入って、つられて歩き始めた。
公園から歩いてすぐの、広瀬と表札の出た家に二人は入ってゆく。横開きの扉を開け、和風建築の廊下を真希は無言で歩いて、ひとつの部屋の前で止まった。
「ここ、あたしの部屋だから。中で待ってて」
それだけ言い置いて、真希は廊下を戻っていってしまう。

留美は少しの間真希の後ろ姿を見送っていたが、手持ち無沙汰なこともあり、結局言われるままに中へ入った。
思ったより可愛らしい部屋に、留美は少しだけ驚いた。
この部屋だけカーペットもパステル系で、地味な和室を女の子らしくまとめてあった。
床に落ちているクッションのひとつに座って、本棚に視線をやっているうちに、真希が戻ってきた。
「お茶だけど」
「あ、ありがと」
「今度は別に下剤は入ってないわよ」
そう言うと、にまっと笑いかけて湯呑みを差し出した。
「あ……あれって広瀬さん、だったの」
考えてみれば、それらしい兆候は充分あった。
驚いて身構えた留美に、真希は真面目な顔でうなずいてみせる。
「あの時のことはあたしも、頭がどっかイッちゃってたんだと思うけど、あたしね、あんたに下剤盛って恥かかせてやろうとしてたのよ」
「何で」

それは、前から訊きたかったことだった。
「だってあんた、結構やなやつだったから」
「え……？」
言葉に詰まった留美をよそに、真希は自分の湯呑みに口を付けた。
「あたしさ、最初あんたって結構あたしに似た奴かなって思ったのよ。気い強そうだし、どっちかと言うと周りの人間背負い込んじゃって……そうだ。武道場の側だったわよね」
そうだった。
竹刀の音を聴いて、辛い思いを堪えていたあの日。
「武道場の方を見て、凄く思い詰めた顔してて……なのに、声をかけたらいきなり八方美人モードになっちゃって。そりゃ初対面だけど、あんたにとってあたしは何も解ってあげなくてもいいような奴なのかって思ったら、思いきりむかついた」
「そんな、つもりじゃ……」
留美の弱々しげな言葉を、真希はひったくった。
「ないかもしれないけど、あたしはむかついたんだってば。そこで話を折らないでよ」
「あ、ごめん」
「しかもさ、あんた男の子にばっかり愛想よくしてたじゃない。そりゃあんたは可愛い顔

してるから、もてるのは充分解ってるけど、女友達なんかいらないわ、みたいな感じでろくすっぽ話もしやしないし」

ただ乙女らしくなるのに精一杯で、誰かからどう思われているかについては全く気が回っていなかったのだ。

しかし、今から考えてみれば真希の言い分も充分に理解できる。

「何だか、あたしと似てるなって思った奴が、男に媚びまくってたのがめちゃくちゃ腹がたって……そう思ったら、あたし、みんなを煽動してひどいことしてた」

真希は厳しい顔をしてうつむいてしまっていた。

「あたしがやったこと、後で考えてみたら絶対許せることじゃないのよね。七瀬は謝っても許してくれる必要ないと思うけど、あたしは……謝らなきゃいけないと思うから。どうしても、誤らなきゃいけないと思うから」

「もういいよ。あたしにだって、絶対悪いところあると思うし」

「七瀬？」

真希の呼びかけに、そう呼んでいた別のひとのことを思い出す。

いなくなった王子様。子供っぽくて型破りな恋人。

「どうかしたの？」

「え？」
「あんた、凄く悲しそうな顔した」
似ているというだけあって、読まれやすいのかもしれない。
留美は気弱げに笑うと、真希の方に顔を向けた。
「あたしが一番好きになったひとが、あたしのこと、そうやって呼んでたんだ」
「前の学校のこと？」
「ううん、うちのクラスのこと」
真希は不思議そうな表情を浮かべたが、黙って問く姿勢を取った。
「あたし、前に剣道部に入ってて……そこで体を壊したの。凄く凄く頑張ったけど、もう二度と剣道はできないって」
これと同じ話を浩平にもしたことがあった。
その時と同じことを、真希にも話して聞かせる。
「だから、乙女になることしかなかった状態で、転校してきたんだ。そこで、あたしは一番大好きになるひとと逢った」
「うちの学校で？　でも、あんたが気のありそうな男なんていないじゃない」
「絵空事だと思うんじゃないかって気がするけど、あたしが転校してきた二年の時、窓際

の一番後ろの席に座ってた奴がいたんだ」
　真希は少し考えて口を開く。
「あの、空いてた席のことよね」
　留美は小さくうなずいた。
「あそこに座ってた折原……あいつは結構やなやつで、馬鹿ないたずらとかするし、最初、大嫌いだった。あの、広瀬さんともめる機会になっちゃったクラスの人気投票で、住井と昼ごはん賭けてあたしを応援してくれたんだ」
　真希は眉をしかめて呟いた。
「そいつ……馬鹿？」
「うん。でも、あたしがクッキー持ってきた時あったでしょ」
「あ、あの時はごめん。あたし、本当にあんたのこと傷付けることしか頭になくって、クッキー、本当は食べてないのよ」
　言いにくいことでも、真希は正直に話してくれた。
「うん、あの時に必死で拠り所にしてた『乙女』を折原が守ってくれたんだ。怒鳴りだしそうなあたしの代わりに、折原が怒鳴ったんだ」
　真希はしばらく口をきかなかった。

長い間黙って、やっと言葉が漏れる。
「怒鳴られたような憶え、あるような気がする……」
「その時、あいつはあたしの王子様になったんだ。広瀬さんは笑うかもしれないけど、王子様になった折原は、本当にこのドレスを贈ってくれて、ダンスホールの予約をしたまま……いなくなったの」
真希は顔を強張らせた。
「みんなの記憶から折原のことが消えちゃった。あたしだけ、あいつのこと待ってる。あいつから贈られたドレス着て……毎週毎週あそこに立って。あたしばっかり、あいつがいたこと、大好きだったことを憶えてる……」
留美は頬を伝い落ちる涙を手で拭こうとして、腕に長手袋をはめていたのを思い出してそれを外そうとする。
「これ、使えば？」
真希が、自分のクロゼットからミニタオルを出して渡した。留美は一度タオルを受け取り、結局長手袋を外してしまう。
浩平がいなくなった時にも、泣かないでいられたのに。
留美はただ、眼頭を押さえ、溢れる涙をタオルで拭き続けた。

真希は何も言わず、留美の側から離れないまま、泣き顔から視線をそらして、ぽんぽんと肩を叩いた。
頑張ったんだね、というように。

泣き止んだ留美の前に、真希はあたたかいおしぼりを差し出した。気が付かないうちに、おしぼりを作って持ってきてくれたらしい。
「ちゃんと拭いておかないと、顔、腫れたままになるわよ」
「あ、ありがと……」
少し冷めたのか、人肌よりぬるいくらいのおしぼりを、留美は顔に当てた。
「いきなり泣き出してごめんね、広瀬さん」
「そういうのはいいのよ。あたしは気にしないし……第一、あたしはあんたのこと、信じたからさ」
思いがけない言葉をかけられ、留美は眼を丸くした。
「信じてくれるの……?」
「今の七瀬は、最初の八方美人してた頃の七瀬と違うじゃない。無差別に振りまいてる笑顔と、好きな男ができて自然に女らしいのとは絶対違うわよ。今の七瀬にあたし、あんな

ひどいことってそもそもできなかったと思うし……っていうか、この状態で邪魔すんのって、その男に横恋慕してる奴だけじゃないの？」
「……広瀬さん」
「うーん、広瀬さんってのもなしにしない？　あたしが呼び捨てしてんだからさ。そういうのって、ちょっと嫌じゃない？」
「そう……そうよね」
やさしい瑞佳に対して、浩平のことを打ち明けようと思わなかった理由のひとつは、そこにあったような気がする。
好きでも嫌いでも、呼び捨てした相手にさん付けされてしまうと、少し距離を置かれているようで、腹を割って話すのが難しくなってしまう。
こういうところも、真希とは似ているのだろう。
「じゃあ、真希……」
「うん？」
留美は笑いかけた。
「あたしのクッキーの味は、ちゃんとそのうち味見してもらうわよ。あの時のクッキー、それまでの最高傑作だったんだから」

「それを言うなら、うちの味噌汁があんな味だって思われたままじゃ嫌だから、そのうちうちでごはん食べていきなさいよ」
ぷっ、と二人同時に吹き出した。
こんなのも悪くはない。
こんな風に、浩平といたことで自然に変わった『乙女』の部分は、浩平がいた痕跡として残っているのだ。
(この世界には、ちゃんと折原がいたんだよね)
窓から、さっきより強くなった雨音が聴こえる。
「あたしの服貸してあげるからさ、今日は着替えていったらいいわよ。せっかくのドレス、濡らしたくないでしょ？　その彼氏のプレゼントなら尚のことじゃない」
「うん……じゃあ、洗濯して明日返すね」
「解ったわ」
真希はクロゼットを開けて、留美に合いそうな服を探し始めた。
「じゃあ、また明日。服、ありがとね」
「乾かなかったら服は今度でいいわよ」

「うん、またね」
傘を借りてドレスを入れたビニールバッグをぶら下げて帰る。
高台から下を見下ろすと、雨のせいで街がくすんで見えた。
(折原のいた痕跡……)
みんなが忘れているだけで、少しずつ残っている浩平の残した痕。
(折原……早く、戻ってこないと駄目だよ。みんな、いつまでも同じじゃいないんだから)
ふと思い立って、自分の家とは逆の、浩平の家に寄ってみた。
ガレージに車が停まっていないのを確認して、そっとポストの中を覗く。
浩平を起こしに入る時、ポストの裏に貼ってあった小さなマグネット付きボックスの中にしまってあったはずの鍵は、ボックスごと消えていた。
ここに寝起きの悪い少年が住んでいた痕跡が、ひとつ、消えていた。
「嘘……」
留美は浩平の痕跡を求めて思わず走り出していた。
(そうだ。あそこなら……!)
商店街で、二人でごはんをご馳走になったあのおばあさんの家。
しばらく来ないうちにひときわ古びたように見える家の、横開きの扉に掌をかける。し

かし、扉は鍵がかけられていて、誰かが中にいる様子はなかった。
留美はあちこち見回した後、真向かいにある花屋に入っていった。
「あの、すみません」
「はい、何でしょう」
気のよさそうなおばさんが留美に笑いかけてくれる。
「あそこのおばあさん、どうなさったんですか？」
「ああ、先月に腰を痛めて入院しちゃったのよ。退院してからも、やっぱりお年寄りだけだと心配だからって、ご家族と一緒に住むことになったらしいねえ」
だとしたら、もうおばあさんの記憶に残っている浩平を探すこともできない。
強張った顔の留美に、おばさんが心配そうに声をかける。
「どうかしたの？　浜田のおばあちゃんに何か？」
留美は無理に笑顔を浮かべ、首を振った。
「ううん、いいんです。前にごはんをご馳走になったから……時間がたったけど、お礼を言おうと思って。もし連絡があったら、伝言お願いします」
そう言って頭を下げると、留美は早足で商店街から立ち去った。

その夜、雨は振り続けた。

翌日。

洗濯して乾燥機で乾かしてから、濡れないようにバッグに入れて学校へ持ってくる。

「真希、服、ありがと。助かった」

「いつでもよかったのに」

突然仲が良さそうに話している二人を見て、周囲にどよめきが走った。

「真希……どうしたの？　七瀬さんと何かあった訳？」

留美をちらちら見ながら囁く取り巻きの声に、真希はうるさそうに答えた。

「あたしが七瀬と喋って何が悪いの？　あたしが誰と話そうが、文句を言われる筋合いじゃないわよ」

さすがにこういう時の真希は迫力がある。

こういう時には、友達でなく取り巻きであることを選んだ少女達の出る幕はない。

「うん、そ、そうよね」

留美は少しだけ彼女が気の毒になりながらも、思わず真希の方に考えがいってしまう。

(真希も何だか……あたしと同じようなことでしんどい思いしてるのかな)

可愛い系、姉御肌と傾向は違っても、本当に考えていることを解ってくれる人が少ないのは同じかもしれない。その状況に割り切れない気持ちを抱いているから余計に、転校当時の留美が許せなかったのだろう。
そんな気がした。

一学期が終わり、最後の夏休み。
真希と一緒に予備校の夏季講習に通ったり、夏のデザートの作り方を教えてもらったりしながら時間はたっていった。
「うっわー、ゼリーって……簡単っ」
「何でクッキーが焼けてゼリーが作れないのよ。クッキーの方が絶対しんどいでしょ」
広瀬家の、どう考えてもキッチンという言葉が似合わない和風の台所で、色とりどりのゼリーを冷蔵庫にしまいながら、留美は息をついた。
「だって、乙女っていったらクッキー、って、それしか頭になかったから」
「あんた……もうちょっと乙女の実情を知りなさい。ま、そういうところが七瀬らしいと言えるんだけど」
あと一時間もすれば、冷蔵庫からふるふるで冷たいゼリーが出てくるのだ。

何となく嬉しくなってしまう。
(そう言えば折原とはゼリーって、食べたことなかったな)
もちろん、留美が転校してきたのが晩秋なのだから、そんな頃に冷たいものなどわざわざ食べる訳がない。
春のお花見。
真夏のプール。
そしてもうすぐ、秋が訪れる。
浩平と過ごしてこなかった楽しいこと。
(折原、どうして戻ってこないのよ……)
うつむいている留美の前に、真希がどんっ、と麦茶の入ったグラスを置いた。
「こらっ、七瀬っ。沈まないの。これ飲んだらまた英語の続き！」
「はーい」
留美はグラスに口をつけた。
秋が過ぎ、また、ドレスでは寒い時期が戻ってくる。
(あたし、こんな恰好でよく風邪を引かなかったわね)

あの時の留美は、浩平の状態についての違和感が気になっていて、とても自分の体について考えている余裕はなかったのだ。

浩平と逢って一年にもなる今にしてそれを理解する。

もちろん、三月に入ってからの方が当然温かいが、それでも寒い思いをしていたはずだ。

（今度から、防寒具が必要かな……）

寒空の下、凍えながら立っていては真希に怒られてしまう。

留美は自分の体を抱くようにして、公園を立ち去った。

年が明けるとクラスの雰囲気も張り詰めたものになってきた。

職員室で担任と向かい合って相談する機会も、何度あっただろう。

「七瀬なら、○○大は大丈夫だろう。もう1ランク上の大学を狙ってもいいと思うぞ」

ここから電車で一時間以内で通える○○大を受けるつもりだった留美に、担任はいくつか他の大学のリストを見せた。

「あ……っ」

数箇所示された大学のうちのひとつの名前の上で、留美の視線が止まった。

△△大学。

転校してくる前に住んでいた街にある大学だった。
向こうに住んでいた時には、△△大を受けるつもりでいたものだった。
「あの……△△大はどうでしょう」
「△△大か。うん、今の七瀬なら受けてみてもいいと思うぞ。一学期に較べて、頑張ってるからな」
「そ、そうですか……」
何となく聞いただけだったのだが、担任は嬉しそうにノートに△△大と書き加えた。

(これって、ここにいちゃ駄目ってことなのかな)
廊下を歩きながら、留美はうつむいて考え込んだ。
毎週毎週、ただ公園で来ない人を待ち続ける日々はよくないよ。時が止まったように、世界から眼をそらしてはいけないよ。
そう言われているような気がした。
溜息をつくと、息が白く広がる。
「あ、雪……」
去年の今頃は、雪を見ても何の感慨もなかった。

それなのに、どうしてこんなに悲しいのだろう。
もう一度、浩平と一緒にいた楽しい時間が巡ってくることなど有り得ない。
過ぎてゆく時間が、それを一番残酷に教えていた。
進路が決まった生徒の話を聞いていると、余計にそれを痛感する。
音大に入学が決まった瑞佳。
留美の知らない大学に入学する住井。
真希もまた、自分の進路に向かって遠くの大学に入学するらしい。
(あたしだけ、取り残されてる)
ぼうっと窓越しに雪景色を見つめ、留美は立ち尽くしていた。

ふたつの大学を受け、その両方から合格通知が届いた頃にはもう、雪の季節を過ぎ、そこかしこに春の息吹を感じるようになっていた。
ふたつの合格通知を見て、留美は溜息をついていた。
その、思ったより安っぽい紙切れ二枚が、留美の選びうる未来を端的に現している。
ただひたすら、浩平との思い出に固執し、時を拒むように待ち続ける未来。
浩平のことを忘れ、全てをやり直す未来。

（折原……こんなのひどいんじゃないの？）

もう充分待ち続けたはずだ。

目立ちすぎるドレスで公園に立ち尽くす週末。一年そんな暮らしをし続けて、留美の心はもうお釣りがくるくらいずたずたになっていた。

（もう、終わりにしていいよね……折原）

留美は合格通知をデスクに置くと、服を着替え始めた。

エピローグ

上等のドレスはもう煤けてしまっていた。
長手袋のはめ方も、すっかり馴れてしまった。
このドレスと共に待ち続けた時間の長さが、留美の心を痛めつけていた。
(これで最後……このドレスを着るのも)
何もかもを拒んで大好きな男の子を待ち続けた一年。
過ぎる時にも、浩平の痕跡だけを探し続けた四季。どんどん消えて、浩平がいたことの記憶だけでなく、何もかもが薄れ、消えてゆく。
二度と王子様は現れない。
舞踏会は決して開かれない。
シンデレラは、灯のともらないお城を見上げながら、いつか考えるはずだ。
ただ黙って暗闇の中でパーティが始まるのを待つよりは、自分で見つけられる何かを探しに行こう。
ドレスを脱いで、歩きやすい服に着替えて。
綺麗な夢は、胸の奥にしまって。
そう、自分の脚で歩き出すのだ。
公園の樹々にはやわらかい緑の葉が芽吹いている。

どこからか匂う沈丁花の香りが甘ったるくて、思わず瞼を細める。
時の流れている世界は、こんなに美しいのだ。留美が今まで見ていなかった一年分の時間を、これから取り戻してゆかなければならない。
「もう、終わり」
わざと明るい声で、自分に言い聞かせた。留美は浩平との思い出を切り捨てるように、ぎゅっと瞼を閉じる。
もう大丈夫だ。
きっと、時は流れ出す。
浩平がいなくても、きっと流れ出す。
決意に満ちた眼を前に向け、留美は一歩を踏み出した。

時計が五時を指した時、風が流れた。
「あ……っ」
なびく髪で視界が遮られる。
髪を掌で押さえながら歩き出そうとしたその時。
遠くから凄まじい轟音がこの公園に近づいてくるのに気がついた。

「えっ？」
これから降りようとする石段を、とんでもない音をたてながら何かが上がってくる。
「うおおおおおっ！」
自転車だった。
自転車は留美の眼の前で派手に砂埃をたてて急停車し、サドルから転がり落ちるように乗っていた人物が降りてきた。
無茶な運転をしてきたせいか、大きく肩で息をしていた。
「ま……まにあった……お待たせ、お姫様」
にっと笑ってその人物、ずっと待っていたはずの王子様が手を差し伸べている。
「さあ、乗れ」
ずっとずっと待ち続けていた王子様。大好きな浩平。
浩平は黒いスーツ姿で自転車を馬車代わりにやってきたのだ。
どう言葉を発していいのか解らなかった留美は、しばらくして、ようやくふくれっつらを作った。
「恰好悪い」
「文句言うな。これでも精一杯役作りしてるつもりだぞ」

王子様は世にもぞんざいな口調で抗弁する。
「言葉、役になりきれてないじゃないっ」
「現実とはこんなもんだ。ほら、乗るのか乗らないのか、さっさとしろっ」
「そんな王子様いないっ！」
舞踏会に一年も待たされたのだ。
お姫様には文句を言う権利が絶対あるはずだ。
浩平は苦笑しながらも次の誘いの言葉を向ける。
「贅沢な奴だな。ほら、乗った乗った！」
「そんな威勢のいい王子様もいないっ」
浩平は機嫌を損ねることもなく、嬉しくて仕方がなさそうな表情で恭しい口調を作ってみせた。
「じゃあ、お乗り下さい。お姫様」
「そう、いい感じ」
留美は浩平がまたがった自転車の荷台に、ドレスの裾に気遣いながらまたがった。
「よっしゃ、行くかっ」
世界の動き始めた音は、回転するチェーンの音。

埃だらけになった自転車の輪が、タロットの運命の輪のように回り始める。
止まっていた時間は、確かに動き始めていた。

それから数秒後、留美は浩平が現れた時の轟音を自分で体験することになった。
「石段、そのまま下りるなぁっ!!」
「急いでるんだっ」
「どうしてっ！」
留美が叫ぶと、浩平は走りながら一瞬だけ顔を後ろに向ける。
「馬鹿、何の為に待ち合わせしてたんだよっ」
そうだ。
二人で踊る為に約束を交わしていたのだ。
待ち続ける間が長くて、忘れかけていたドレスの意味を留美は思い出していた。
留美は浩平の黒いスーツにぎゅっとしがみ付いた。
スーツから防虫剤の匂いがする。
「えっ」
よく見ると、浩平の着ていた黒スーツはタキシードではなかった。

「これっ、喪服じゃないっ。タキシードはどうしたのよっ」
「そんなものがうちにあるはずないだろう。間に合わせだっ」
凄いスピードで石段を落ちるように走る。衝撃のせいで腰が痛くてたまらなかった。
降りきってしまうと、すぐに商店街への道になる。道が平坦になっても、腰の痛みは全然引いてこなかった。
「そ、それであたしと踊る気っ⁉」
「構うか」
「構うわよ、あたしがっ！」
人通りが多くなってくると、留美達へ好奇と驚きの視線が集中する。
「どいてくれえええっ」
浩平の声に、周囲の人並みが一気に引いた。
突然走りやすくなった道を、自転車は滑らかに疾走する。
やがて、目的の場所に自転車は止まった。
腰の痛みを堪えて降りた留美に、浩平は手を差し伸べる。
「お姫様、どうぞ」

「腰が痛くない？　王子様」
「そのへんは気合で勝負だ」
「うん、そうだね」
留美と浩平は笑い合った。
「じゃ、行こうか……お姫様？」
浩平が留美の為にドアを開けてくれる。
留美はにこやかに微笑むと、ちょうど二人を迎え入れるように始まったメロディに迎えられ、ダンスホールに足を踏み入れたのだった。

了

あとがき

こんばんは、館山緑です。
本当にお久しぶりの『ONE～輝く季節へ～』4巻は、いつも乙女を目指して頑張ってる、元気な七瀬留美ちゃんです。
それにしても、とうとう4巻まで来てしまいましたね。登場するヒロインの人数の半分を超えてしまいました。ワタシとしても、かなりびっくりです。

留美ちゃんは、すごく元気で頑張りやさんな女の子で、でも、その頑張ってる気持ちの半分くらいは基本的に報われていない、かわいそうなところのある子です。
留美ちゃんが通ってきた苦労とかって、恋を夢見てた女の子が現実の男の子に恋をして通る過程として、女の子の読者の方には『あ、こういうの解る』とか『七瀬、かわいすぎだ！』と思えるところがいっぱいあったりするところもあると思います。
かく言うワタシも、初めてクリアしたのは留美ちゃんで、とても思い出深いキャラだったりするんです。
『ONE』の中で、女の子が恋をする過程に一番焦点を当てられているシナリオなので、留美ちゃんへの共感は個人的に高かったです。

そう言えば、留美ちゃんの物語を書く上で、ワタシも当然聴きました。例のデスメタルです。でも、ホラーな好きなワタシには、デスメタルはかなりオッケーだったので、逆に困ってしまいました。好きなものを嫌なものとして書くというのは、なかなか大変です。

でも、ワタシも生まれてからずっとメタルがオッケーだった訳でもないので、その、駄目な当時の自分を思い出し、『ぐぐっ、これ聴くのしんどい……』モードを復活させることができました。(間抜けかも)

3巻で『ローテクだからホームページは作らない』と言っていたのですが、とうとう作ってしまいました。ハイテクになった訳では全然ないのですが、謎の怪音波を発するようになったパソコンを買い換えまして、新しいパソコンを購入したのです。

で、趣味のホラー&ガワのページを作ってみましたので、そっちが好きな人は、よかったら遊びにいらして下さると嬉しいです。

L i Q U i d　r E D (http://homepage1.nifty.com/croe/index.html)

最近はずっと、ゲームのお仕事ばかりやっています。

本来は企画・原案だけだった『記憶の海から～WATERMARK～』を、シナリオもや

らせていただくことになりました。五月発売ということになりましたので、その頃にゲームショップを見て、気が向いたら手にとって下さると嬉しいです。

次は、ゲームに先だって、五月に発売される『記憶の海から～WATERMARK～』のノベライズでお逢いできたらいいですね。

それでは、また。

半月だけが照らす闇夜　二月

館山　緑

ONE～輝く季節へ～④

2000年4月1日　初版発行

原　作　Tactics
著　者　館山　緑
発行者　髙橋　豊
発行所　株式会社ムービック
〒173-8558 東京都板橋区弥生町77-3
Tel.03-3972-1992
編集装丁　柏木秀博
黒木三郎（デザインワーク）

9784896014808

1920293008578

ISBN4-89601-480-4

C0293 ¥857E

定価／本体価格857円+税

発行／株式会社ムービック

8320-0331-WA04

ONE

～輝く季節へ～